



広報アドバイザー 佐野允彦の

おの歴史散歩



「小野市絵図集」刊行 。大地に刻まれた歴史さぐる

「小野市絵図集」が発刊された。十数年に及んだ市史編纂事業の最後を飾る成果だ。所収の47枚は、「播磨国風土記」以来の来住地区、義経伝説の地、中世史上有名な大部荘、江戸初期に開発された小野陣屋町など豊かな歴史を持つ小野にふさわしい古絵図・古地図の数々だ。

絵図集編纂の責任者、大山喬平・京大名誉教授によると、1枚の絵図を広げ、地理や日本史の専門家たちがどんな情報を読み取れるか、意見を交し合ったという。その成果が各絵図の解説に盛り込まれていて、読み応えがある。

解説の中で特に私が興味を持ったのは、市場町の「ブツブツ」だ。記述によると、「字塩之供御」にあり、重源上人の弟子、善阿（鎌倉時代）が夢によって沐浴塩水の泉を得たとの伝承がある。今も鉱泉が湧き、石碑があるという。絵図集とふるさとマップを手に、市場小学校の東側と見当をつけ、現地に向かう。

地元の人に所在を尋ね、田んぼのそばに石碑を見つけた。ちゃんと泉もあった。なぜ塩泉にこだわるのか。

それは「播磨国風土記」（奈良時代）の記述があるからだ。風土記には、播磨国内で4箇所の塩泉が記録され、その一つが小野に近い賀毛郡穂積里。市場の塩泉も奈良期から湧いていたかもしれないと夢想する。

小野市最古の村絵図である元禄15年（1702）の久保木村絵図の説明文で気になる記述が一つあった。久保木を「久保喜」と表記していることを「昔の人々は漢字表記にはそれほどこだわらなかった」とするが、村の永續と発展を願い、「久しく喜びを保つ」との思いを込めた表記だと私は推察したい。

歴史地理学の専門家、金田章裕・京大名誉教授には私の高校の先輩という縁で次のコメントをいただいた。「江戸・明治時代の47枚の古地図をカラー写真で見ることができるのはありがたい。大山喬平先生をはじめ、小野の歴史・地理に詳しい碩学の解説が理解を広げよう」。

よそ者で小野の土地勘がほとんどない私でも絵図集を見ながら徐々に小野の歴史に遊ぶことができた。土地勘のある地元の人なら一枚の絵図からもっと多くの歴史情報を読み取ることができるに違いない。



小野市絵図集 47枚



広報アドバイザー 佐野允彦の

おの歴史散歩



船木南山古墳 お墓も神も出雲から？

10月(旧暦)は全国的には神無月だが、出雲では神在月だ。諸国の神々が皆、出雲に参集するからだ。出雲と言えば、縁結びの出雲大社をはじめ出雲神話や出雲そば、宍道湖のシジミなどが有名だ。

考古学的には青銅器の宝庫、神庭荒神谷遺跡が一番有名かもしれないが、「四隅突出型墳丘墓」(以下四突墳と略す)もよく知られている。名前の通り四角い墳丘の四隅がヒトデのように突き出している墳墓で、出雲を中心とする山陰地方に特徴的な弥生時代中期～後期(2世紀～3世紀)の首長墓だ。

筆者は松江支局勤務時代(1985～87年)、島根大学の田中義昭教授(当時)の案内で出雲市にある西谷3号墓を見たことがある。調査途中だったが、「これが四突墳か」と感激したことを思い出す。規模や副葬品から出雲の王墓とされる。

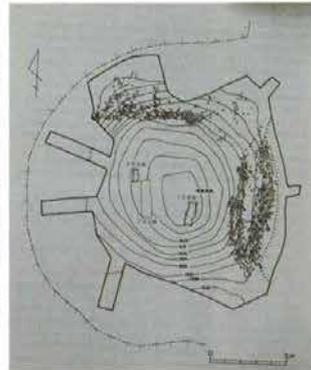
この出雲王国の葬送祭祀の象徴である四突墳かもしれない遺跡が市内にもあったのだ。それが船木町南山の船木南山古墳だ。加古川支流の東条川左岸の段丘上に位置し、1991年調査された。墳形はほぼ方形で、北側と東側に張り石が残り、北東と南東に突

出部を認め、調査した市教委・西田猛さんは弥生後期の四突墳と判定した。加西市にも四突墳とされる周遍寺山1号墳があり、北播磨の一部が山陰文化の影響を受け、四突墳を受け入れたと西田さんは推察する。市内の垂井遺跡では山陰に特徴的な甗(こしき)型土器が出土している。

出雲の墓と言うと、「播磨国風土記」に記された、相撲の神様でもあるノミノスクネの「出雲墓屋」伝承を想起する。出雲の人々が立野(龍野)に来て墓を築いたという。

もともと播磨風土記に大汝命(オホナムチ)=大国主ら出雲の神々がよく登場するのは知られた話だ。著名な哲学者で、古代への造詣が深い梅原猛氏は播磨の主神、伊和大神も大国主と同神とみ、さらに四突墳を大国主のための原出雲大社を模したもので、との大胆な発想を示された(『葬られた王朝 古代出雲の謎を解く』)。

船木南山と周遍寺山については四突墳でないとする研究者もいる。墳丘墓をめぐる紛糾しているのだ。だが、いずれ播磨でも明確な四突墳が見つかり、西田さんらの見解が突出した意見でなくなる日がくるかもしれない。





広報アドバイザー 佐野允彦の

おの歴史散歩



『浄土寺の落書』 文化財保護強調月間に寄せて

イタリアの大聖堂で日本人の学生が落書きをしたことが発覚した(2008年)のが端緒で、国内外の落書きが大きな問題になったのは記憶に新しいだろう。近隣では世界遺産・姫路城で昨春、国宝・重要文化財の建物82棟で606ヶ所もの落書きが確認された。痛ましい状況と言わざるをえない。

火山の噴火で埋没した古代ローマの都市、ポンペイにも当時の落書きが多数残されていたという。日本では奈良・法隆寺の堂塔で戦後の修理時に落書きが数多く発見された。画工や大工らの作業らしく、8世紀ごろのもので、日本史上最古級の落書きとされる。落書きは古今東西を問わず、人間の性かもしれない。

小野市では国宝・浄土寺の浄土堂の板壁に残された『落書』が有名だ。と言っても現代の落書きではなく、戦国時代(1506年)から江戸時代初頭(1625年)のものだ。当時盛んだった西国三十三所巡礼の巡礼者による墨書で、参詣者の名前、在所、参詣年月日などが記されており、遠方は奥州平泉、出雲、九州筑前などの地名がある。「小野市史」第1巻によると、侍の家来や若衆を「恋しや」と

書いたラブレター?のような落書きもあるという。これは一見の価値ありと浄土寺に向いた。板壁ははずされて、今は衝立風に仕立てられている。すでに消えかけていて判読が難しいものもあるが、ほとんどが大きな字で、墨痕鮮やかに記されている。「これはお寺の人の目を盗んでこっそり書いた、ただの落書きではないな」と思った。恐らく巡礼者がお賽銭や志納金を納めた上で、寺の了承のもとに参詣記念で書き残したものだだろう。

これらの『落書』から浄土寺が中世末の西国巡礼の人気霊場だったことがわかり、当時の西国巡礼の様子を知る上で貴重な史料とされ、1996年市の文化財に指定された。

おっと「落書きも文化財になるんや」と誤解しないで。今は犯罪ですよ。姫路城の落書きも警察に被害届を出したそう。11月は文化財保護強調月間。地域の史跡などを訪ね、地域の歴史に思いをさせ、あらためて文化財の大切さを考えてみてはいかが。

えっ、このコラムのほうが広報誌の落書きですって?落胆。





広報アドバイザー 佐野允彦の

おの歴史散歩



小野藩主・末徳は暗君か？ 映画「十三人の刺客」で考える

最近、神戸で公開された映画「十三人の刺客」を観た。池宮彰一郎原作で、映画は13人の侍が明石藩主・松平斉韶主従約300人を襲撃する50分間の激闘シーンが話題になった。悪逆非道の暴君ゆえに幕閣の密命で暗殺されたわけだが、この殿様、モデルは同藩15代藩主、松平齊宜とされている。地元明石ではあまりにもひどい暴君ぶりの映画の描き方に波紋が広がっているようだ。

さて、我が小野藩・一柳家には暗君と呼ばれる殿様はいたのだろうか。気になる本を見つけた。八幡和郎著「江戸三〇〇藩 バカ殿と名君」は、11代末徳=写真=を暗君のように扱っている。理由は幕命による大阪湾岸・市中警備を大坂の侠客、小林佐兵衛に丸投げしたことだという。

だが、その根拠は司馬遼太郎の小説「侠客万助珍談」(のちの長編「俄(にわか)」)だ。小説では身分は足軽頭で、苗字帯刀、騎乗を許し、藩は経費を出さない代わり侠客の自宅を藩邸の名目とし、賭場開帳を黙認したという。

小林は実在の侠客で、明治維新後は大阪の消防頭取になり、授産所を設けるなど社会事業や慈善事業に尽力した。藩主・末徳が1863年、幕府から大阪

の沿岸警備を命じられたのは事実だが、小林を十分に取り立て、警備を任せたとする史料はないようだ。

社高校長などを勤めた藤本欣司さんは著書「小野旧藩誌補遺稿」(1996年刊)で、小林の足軽頭登用など「全くの誤りである」と指摘した。小野藩政史に詳しい旭丘中校長、石野茂三さんも「長年、史料を探してきたが、小林がらみの古文書は出てこない」と口を添える。

藩主・末徳は当時、まだ14歳で、丹波綾部藩・九鬼家から養子に来たばかり。それでも末徳は京都御所警護に続き、大坂警護の現地検分を果たしており、暗君視するのはいかなるものか。百歩譲ってもし侠客に警備を委ねたとしてそれが愚政と言えるのかどうか。長州の奇兵隊は農民・町人ら庶民も登用したし、徳川家も江戸の侠客新門辰五郎に江戸の防火を任せたとの例もあるからだ。

では、先祖が播磨出身の司馬さんがなぜ小野藩に悪感情を抱いたのだろうか。この稿執筆のため東大阪市にある司馬記念館へ足を運び、あるヒントをつかんだ。だが、誌面の都合でいまは藩主・末徳と小野藩の汚名をすすぐだけにとどめておきたい。



小野藩11代藩主 一柳末徳



広報アドバイザー 佐野允彦の

おの歴史散歩



とかく 兎に角ウサギ 小野に残る兎資料

市民の皆様、明けましておめでとうございます。皆様のもとにも兎の絵柄の年賀はがきは何枚も届いていることでしょうか。そう、今年は卯(兎)年。

日本史(文献)上、最古の兎は「古事記」に登場する因幡の白兎だろう。最も有名な兎は「かちかち山」の兎が、それとも月で餅をつく兎が。少なからぬ子どもたちが、唱歌「故郷(ふるさと)」の「兎追いしかの山」を「兎おいしい」と思っていたようだ。

さて、我が小野藩・一柳家では、兎の血を素材にした薬があった。「兎血丸」(うけつがん)と呼ばれる。「小野市史」などによると、「公私日記」という史料の19世紀中ごろ以降の記事に記録されている。その兎狩り(1844年)は藩の主導のもと、鉄砲組のほか百姓の勢子(狩場の人夫)300人、網張人足27人なども出動する大掛かりなものだった。

捕獲した兎6匹の生血で医師3人が丸薬を製剤した。この薬は小児が天然痘にかからない

ようにする予防薬とされ、藩はこれを領民に無料配布したという。小野市の小児医療費無料化の先駆けとも言える。関西では小野藩特産の薬だったようだ。「兎血丸方」と記された袋が好古館に残っている(写真①)。

さらに、久保木町の住吉神社に兎の木彫りがあると聞き、現地を訪ねた。三間社流造という本殿で、1718年の建立だ。その建物正面の上部右側に兎の絵柄の木彫りを見つけた(写真②)。左の耳は欠損しているが、足元は波のようで、恐らく「波乗り兎」だろう。拝殿には絵馬が何枚か掲げられており、そこにも2匹の波乗り兎を見つけた。住吉神社は海の神様だから、木彫りや絵馬の波乗り兎を掲げたのだろう。



写真①



写真②

波乗り兎の文様・絵柄は江戸時代以降、様々な美術工芸品に採り入れられた。古代中国では兎の出現は瑞兆とされ、日本でも波乗り兎はおめでたい文様と見られていたようだ。

波乗り兎のようにこの1年、波に乗っていききたいものですね。



広報アドバイザー 佐野允彦の

おの歴史散歩



厳寒期にホットな話題 歴史に見る暖房具

この時節は1年中でもっとも寒い時期だ。皆さんのお宅ではどんな暖房設備・暖房具をお使いだろうか。たぶんエアコンが多く、ほかに各種ストーブ、床暖房、こたつ、まれに暖炉という家もあるかもしれない。

縄文～弥生時代の竪穴住居にはおおむね炉が付設されていた。小野でも垂井遺跡などで見られる。古墳時代中ごろ(5世紀後半)には朝鮮半島伝来の竈(かまど)が出現する。小野では敷地東遺跡などが知られる。

やがて囲炉裏、火鉢、こたつなども登場してくる。筆者は中央アジアのシルクロード沿いの博物館でこたつを見つけ、驚いたことがある。

囲炉裏(いろり)は日本史上、長い間(地方によっては戦後まで)一家の中心であり、囲炉裏端は一家団らんのエリアであり、ちょっとした作業場であり、昔話が受け継がれた場でもあった。ために民俗学の主要なテーマの一つであり、播磨が生んだ偉大な民俗学者、柳田国男にもいくつ論考があるはずだ。

さて、2007年以降、原油高、省エネ・エコ生活でブームという湯たんぽだ。筆者(63歳)は雪国・

富山の生まれ育ちで、1950年代まで湯たんぽを使っていた。波形というか蛇腹形というかプリキ製のものだ。その容器にお湯を注ぎ、布団の足元に入れて使った。

陶製の湯たんぽが普及していた時代があった。丹波焼で江戸中期のものがあるとの話もあるが、今般、兵庫陶芸美術館(篠山市)に尋ねたら、「本来の湯たんぽでなく、酒徳利に湯を入れて使ったものではないか」と教えていただいた。国産の陶製湯たんぽの本格的登場は幕末～明治初期のよう。プリキ製など金属製品が登場すると一時すたれるが、金属が大切になった戦争中は陶製の湯たんぽが復活する。好古館には2人が足を当てて温まることができる陶製の大きな湯たんぽなどがある＝写真。

湯たんぽは東京オリンピック(1964年)前後に姿を消し、豆炭あんか、電気あんか、電気毛布に取って代わられた。それがここ数年、湯たんぽが復活したのだ。いまやレンジでチンする湯たんぽもあるそうだ。

囲炉裏やこたつを囲んで一家団らんがあった時代は、幼児虐待、老人虐待などなかった。囲炉裏やこたつを復活させるかどうかは別として、一家団欒が復活すれば家庭内がもっと温くなるのは間違いない。





広報アドバイザー 佐野允彦の

おの歴史散歩



顕彰の動き高まる 旧藩主の姫、一柳満喜子さん

3月18日は一柳満喜子さん(1884 - 1969年)の誕生日だ。一般にはそれほど知られた人ではなかったが、近年夫のW.M. ヴォーリスの建築の再評価が進むに伴い、満喜子さんにも光が当たってきた。昨秋、ヴォーリス夫妻の伝記(英語版)の翻訳書「メレル・ヴォーリスと一柳満喜子」(水曜社)が出版され、先日小野市でも作家・玉岡かおるさん(小野高校卒)による講演会も予定されていた。誕生日にちなみ、いささか満喜子さんのことを紹介したい。

「一柳」という姓で推察できる通り、旧小野藩主・一柳家の血筋。昨年12月号の広報の本欄で紹介した最後の藩主・末徳公のお姫様だった。また、ヴォーリスは明治38年米国から来日し、滋賀県近江八幡市を拠点に建築のほか、製菓、教育、医療、福祉など多方面に活躍した。50代以上の人なら塗り薬「メンソレータム」(現メンタム)はよくご存知だろう。

私事で恐縮だが、なぜ筆者がヴォーリス夫妻に関心を抱くのか、若干述べたい。私は同志社大学出身だが、その学舎の2、3はヴォーリスの設計で、カレッジソングの作詞も彼だ。卒論で「豊臣政権論」を書いたが、秀吉の甥・秀次の家老に一柳家のご先祖(直末公)がいた。

朝日新聞社に記者として入社、1992年、転勤した先が近江八幡。もちろん夫妻が亡くなられ20数年もたってはいたが、町のあちこちに夫妻の足跡が残っていた。いや、夫妻の事業はなお息づいていた。街中から望める八幡山には秀次が築城し、直末公も詰めたであろう八幡山城跡がある。

八幡在勤4年の間に満喜子さんが創設した近江兄弟社学園の高校野球部が「夏の甲子園」に初出場し、筆者は、足しげく取材に出向いた。

そして2004年、西脇支局に転勤してきたら、持ち場の小野市が満喜子さんのご先祖の藩だっ



一柳満喜子さんとW.M.ヴォーリスさん
(財団法人 近江兄弟社 提供)

た。赴任のあいさつにうかがった蓬萊市長にヴォーリス夫妻の話をしたら、「佐野さん、なんでそんなに詳しいの？」と言われたが、このような経緯があるからだ。

このコラムを書くため、先日久しぶりに近江八幡を訪れた。八幡在勤中、公私にお世話になった保育園長・長谷川郁子さん(75)が満喜子さんに中学・高校の6年間習ったと聞いたからだ。「満喜子先生は学園長で、音楽と英語のほか、キリスト教、行儀作法、掃除の仕方、アメリカ流の最新の性教育まで教わった。指導はすごく厳しかったが、生徒を愛情で包み込むやさしさもあった」と懐かしむ。「満喜子先生の音楽は賛美歌、宗教音楽で、私はカラオケで歌謡曲を歌ってもいまだに賛美歌風になるんですよ」と苦笑する。長谷川先生は現在、保育園のほかデイサービスセンターなども経営する。私利私欲を求めず、教育や福祉に力を注いだヴォーリス夫妻の精神が受け継がれたようだ。

満喜子さんは東京生まれで、小野へは1、2度しか来ていないそうだが、藩政時代、教育や医療、福祉にも意を注いだ一柳家のDNAは、満喜子さん

にしっかり刻み込まれていたのだろう。

夫妻の住居は現在「ヴォーリス記念館」になっており、そこも訪れた。応接室には満喜子さんが弾いたピアノもあった。財団法人・近江兄弟社理事の藤田宗太郎さんから展示パネルの写真撮影と本コラムへの掲載も許可いただいた。藤田さんは「今秋、小野を訪ねたい」と話された。うれしいことだ。

5月14日にはうるおい交流館エクラで講談と室内楽で綴る音楽絵巻「一柳満喜子伝」があり、満喜子さんを描いた玉岡さんの小説も近く出版されるので、ここでは筆者とのかかわりでの話しにとどめた。

満喜子さんは3年後の2014年には生誕130周年を迎える。「小野の歴史を知る会」が満喜子さん顕彰のため現地訪問をするなど先鞭をつけているが、小野市としても近江八幡市などとも連携を深め、ふさわしい記念事業が展開されるよう期待したいものだ。



装飾付き須恵器から藩主上覧まで 小野における相撲の歴史



「広報アトバイザー」佐野允彦の
おの歴史散歩

大相撲の春場所が八百長問題のため中止され、さびしい思いをされたファンも少なくないだろう。実は相撲の歴史には播磨・小野が少なからぬ縁がある。

一つは相撲の祖とされる野見宿禰(のみのすくね)だ。垂仁7年、天皇が出雲から

宿禰を呼び寄せ、力自慢の当摩蹴速(たいまのけはや)と相撲を取らせ、宿禰は蹴速を蹴り倒し、脇骨を踏み折って殺してしまう(「日本書紀」)。事実ならこのころの相撲は、蹴り技もOKの命がけの総合格闘技だったようだ。

「播磨国風土記」によると、宿禰は、大和と出雲往来の途中、立野(龍野)で病死、出雲の人たちが「出雲の墓屋」を造った。龍野には宿禰の墓とされる古墳が複数ある。その一つが西宮山古墳(6世紀前半ごろ)で、何と石室から力士2人と行司らしいミニ土人形を付けた須恵器が見つかったのだ。

小さい人物や動物像などを付けた須恵器を「装飾付き須恵器」と呼ぶ。これを主要な研究テーマとされている井守徳男・播磨町郷土資料館長が1995年、黍田町の勝手野古墳群で力士像を付けた須恵器を発掘された。男2人が向き合い、右の男が左の男の頭を押さえつけ、はたき込んでいるような光景だ。7世紀前半ごろのものとされる。

県立考古博物館の所蔵品で、県指定文化財になっている。いまは野見宿禰の出身地の島根県立古代出雲歴史博物館で開催中(5月16日まで)の企画展「古代出雲の壮大なる交流」に出張中だ。戻ってくるのを待てないという方、好古館にはレプリカが常設展示されているので、それをご覧ください。

筆者の恩師である考古学者、森浩一さん(同志社大名誉教授)は1969年、和歌山市の井辺八幡山古墳で力士像の埴輪を発掘された。6世紀初めのものとされる。これが契機で

森先生は相撲の資料に関心を持ち、勝手野の須恵器も発掘後まもなく拝見されたという。

西宮山も勝手野も恐らく首長の前での相撲行事を表現したのであろう。これは国家安泰、五穀豊穰を祈る神事だったと推察する。

安土桃山時代では織田信長による安土や京都での相撲大会が有名だ。のちの羽柴秀次らも見物しているから、ひょっとすると一柳家のご先祖も見物していたかもしれない。

さて、その小野藩だが、「小野市史」によると、享保15年(1730年)に藩主の指示で領内外から農民らの素人力士を集め、100番余の取り組みをしたという。江戸中期には相撲は庶民の娯楽にもなっており、小野藩内の社寺などで毎年のように相撲興行が行われた。弘化2年(1845年)には末延(すえのぶ)公も稻荷社の初午祭に参詣し、相撲などの興行を楽しまれた。

小野出身の力士も何人がいたようで、その代表が天津風(あまつかぜ)だ。「墓が東本町の徳岩寺にある」と聞き同寺を訪れると、確かに墓地の入り口付近に「天津風墓」という墓石があり、「明治15年建立」と刻まれていた。幕末から明治初年にかけて大阪相撲で活躍したようだが、その事跡がよくわからない。ご存知の方があればご教示を。最後に相撲甚句の替え歌で筆をおく。

♪お名残り惜しゅうは候えど ハイ/これで拙文終わります/来月以降もごひいきを/どうかひとえに願います/ハアドスコイ、ドスコイ



勝手野6号墳出土の須恵器に付けられた力士像(県立考古博物館蔵)

「広報アドバイザー佐野允彦のおの歴史散歩」



桜花に上田三四二を想う 来月、記念短歌フォーラム



このコラムを書き進めていた4月中旬、市役所の駐車場の桜は満開だった。その桜花を見ながら、次の歌を思い浮かべた。

ちる花はかずかぎりなし
ことごとく光をひきて
谷にゆくかも

小野出身の著名な歌人、上田三四二(1923~89)の代表作とされる一首だ。昭和50年刊行の歌集「湧井」に収められている。著名な詩人・評論家の大岡信さんが朝日新聞に連載した「折々のうた」⑦(岩波新書)で絶賛している。

残念ながら小野の桜花を詠んだものではなく、昭和44年、桜の名所、奈良・吉野山で詠んだものだ。総じて上田にはふるさと小野を詠んだ作品が極めて少ない。13歳で郷里を離れたからだろうか。

上田は大正12年7月、旧市場村字榎山(現小野市榎山町)に生まれた。生家は今も残り、親族の方が住んでおられる。

神戸電鉄榎山駅近くの山ノ神社境内には「ふるさとの餅」の歌碑が建つ=写真。

ふるさとの餅はうまし咽こしの
つやめくものをこの世とぞいふ

晩年の昭和61年正月の作という。前年末から入院中で、「あと何年生きられるか。正月の餅よ、なめらかにわが咽元を過ぎてくれ」と書いている(「私の人生手帖」1993年)。子どものころから大変な餅好きだったようだ。

上田のふるさと観は複雑で、懐かしく想う半面、「故郷は私の意識のなかで望遠鏡を逆さにのぞくほどにもとおい」とも書く(前掲書)。

「亡き母が私のほんとうの、唯一の、古里なのだろう」という一文もある。

好古館によると、上田の歌碑は全国に8基あり、うち小野にあるのは餅の歌と冒頭の桜の歌(好古館横)の2基だけ。

「晩秋の播州」と題する小文で、市場小学校5年生のときに習った「市場音頭」のことを懐かしく書いている。校長先生が作詞作曲をしたもので、「あんなに楽しい音楽の時間はなかった」と筆も弾んでいる。好古館の協力で

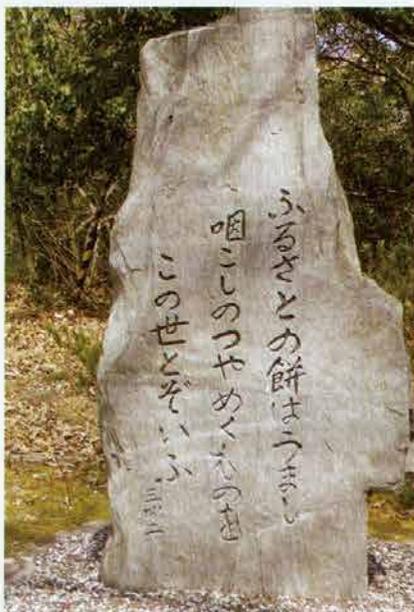
「市場村誌」に歌詞が掲載されているのを見つけた。校長先生は黒田傳作さん、昭和8年10月の作で、タイトルは「市場民謡」であることがわかった。上田が「秋を讃える一節だけは覚えている」と紹介した歌詞の一部が間違っていることも判明した。

この新民謡を歌える人を求めて市場町内を回り、ついに探し当てた。79歳になる男性は「えらい昔のことやな」と言いながら、すぐに思い出して歌ってもらえた。

「学校唱歌とはまるでちがうその浮き浮きする歌」と上田が書いた通り調子のいい歌だ。踊りもあったそうだから、ぜひ復活させて上田の記念イベントなどで披露していただきたいものだ。

この拙文は6月11日に開かれる詩歌文学賞・短歌フォーラムの前触れを兼ねたつもりだ。広報6月号にはこれらの特集記事も予定されているので、楽しみにお待ちください。

上田は2年後の2013年には生誕90周年を迎える。短歌フォーラムや文学賞の行事をとりわけ盛大なものとし、さらなる顕彰活動・記念事業で「文学のまち小野」を県内外にアピールしたいものだ。



「広報おの」3月号の本欄で、有名な建築家・ヴォーリス氏の夫人である一柳満喜子さんが教育や福祉などに取り組んだ情熱は、藩政時代の小野藩主・一柳家のDNAを受け継いだものだろう、と書いた。これはもちろん、満喜子さんの父も母も他家の人なので、



満喜子さんのDNAは 旧小野藩・一柳家にあり



一柳家の家紋

「広報おの」3月号の本欄で、有名な建築家・ヴォーリス氏の夫人である一柳満喜子さんが教育や福祉などに取り組んだ情熱は、藩政時代の小野藩主・一柳家のDNAを受け継いだものだろう、と書いた。これはもちろん、満喜子さんの父も母も他家の人なので、

を展開した。小野藩はウサギ狩りをしてその血で天然痘の予防薬をつくり、領民に配った。下痢の丸薬も配ったほか、疫病対策で神仏に祈祷し、靈験のあるというお札まで配っている。さらに、村の高齢者への生活扶助、捨て子養育への配慮などきめ細かい。

また、臨時的な措置だが、凶作の年には食費補助をし、芝居見物のできなかった困窮領民に施米も実施するなど領民への思いやりある治世をしている。

遺伝子を受け継いだという意味ではない。しかし、小野藩の藩風、一柳家の家風は満喜子さんにしっかり受け継がれていたという趣旨だ。

5月14日、エクラで催された小野音楽絵巻「一柳満喜子伝」でも満喜子さんの業績が披露された。そんな満喜子さんの土壌となった小野藩・一柳家がどんな藩風・家風だったのか、「小野市史」などをもとにひもといてみよう。

まず、教育だが、満喜子さんは幼稚園を手始めに高校まで持つ近江兄弟社学園の学園長として活躍した。小野藩は教育熱心で、小野高校の敷地内に藩校を設けて、藩士の教育にあたった。名前は博学館、伝習館、帰正館と改名されたが、歴代の藩主は藩校の充実を図り、文武両道の教育に力を注いだ。小野の藩校の特長は、藩士だけでなく、庶民にも門戸を開いていたことにある。

特に著名な国学者、大国隆正を招いて学問・教育の振興を図った。弘化3年(1846年)のことだが、江戸期の代表的な道徳・教訓書の小野版を庄屋らに配り、藩校教官を村々に派遣し、講釈させている。

満喜子さんは医療・福祉では、貧しい家の子を保育し、ヴォーリス氏を助け結核療養所を運営、塗り薬メンソレータムの製造・販売など



「一柳家陣屋遺跡」の石碑が建つ小野小学校前

満喜子さんに受け継がれた一柳家の重要なDNAは、神道とキリスト教との違いはあるが、大いなる信仰心と「私財を蓄えず」という精神だろうか。満喜子さんの諸活動はキリスト教の信仰にもとづくものであり、夫妻とも建築設計や塗り薬販売で儲けたお金は贅沢や蓄財に回すことなく、教育や福祉、布教などの活動に注ぎ込んだのだ。満喜子さんは幼稚園創業時、自分のこづかいや少しの持ち物を現

金に換えてその費用に充てていたという。

一柳家はおおむね代々質素儉約に努め、信仰心が厚かった。5代末栄(すえゆき)は自分ひとり神罰を受けてもかまわないから家士・農商・万民の安穩を願い、藩政の再建を神に祈願した(1764年)。この祈願文では「神の恵みによって家臣や領民の生活を安定させてほしい」と訴えている。藩主用の乗馬を安い馬に買い替え、その差額で家臣の扶持米に充てたこともあった。1790年には還暦の祝意も込めて領内の百姓にお金を配り、大干ばつときは領民のために自ら神社に参拝し、雨乞いをした。

小野藩主の治世は、満喜子・ヴォーリス夫妻の信仰心と活動に合い通じるものがあると感じるのは私だけであろうか。

「広報アドバイザー 佐野 允彦の
おの歴史散歩」



災害の歴史に学ぼう 1100年前の播磨大地震



東日本大震災は今月中旬で4か月を迎える。地震、津波、原発事故の三重苦による未曾有の大災害だ。発生以来、「想定外の大災害」とされる一方で、一部の専門家からは「大津波を含め十分予測できた」との指摘も上がった。実際に大津波の危険性と対策の必要性を行政側に進言していた研究者もいたようだ。

その根拠は、平安時代の貞観(じょうがん)11年(869)の陸奥国大地震だ。国府・多賀城(宮城県)が壊滅し、大津波による溺死者は千余人にのぼったという。私的なことながら、我がふるさと、越中(富山県)の国司だった大伴家持(有名な万葉歌人)がのち陸奥征東将軍として多賀城に赴任した経歴を追い、多賀城跡を見学に行ったことがある。20年ほど前のことだが、そのときはもちろん地震・津波は「想定外」だった。

実はこの貞観東北地震のほぼ1年前の貞観10年、播磨でも大地震が起きていたのだ。旧暦で言うとちょうど今月、7月8日のことだ。朝廷の編纂による公式の歴史書「日本三代実録」に下記のような有名な記述(意識)がある。

「播磨国(国衙=今の県庁、姫路市)から報告があった。大地震があり、多くの郡の役所の建物、寺院の堂塔がごとごとく倒壊した、と」。

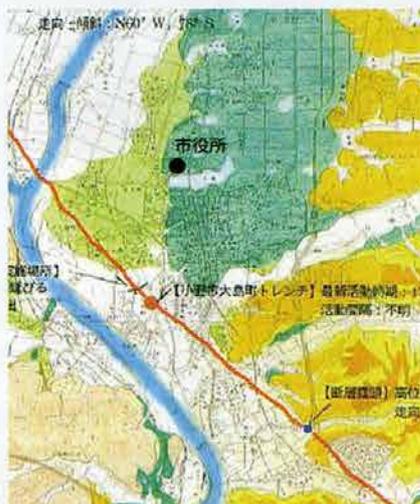
人的被害の記録はないが、播磨全域で大きな被害が出たと推定され、地震規模はマグニチュード7あるいはそれ以上と見られている。阪神・淡路大震災(M7.2)とほぼ同程度だ。

古代山陽道の駅家(うまや)に詳しい考古学研究者、岸本道昭さん(たつの市教委)による

と、布勢駅家跡(同市)では建物が地震で倒壊したと見られる跡があったという。岸本さんに話を聞いたことがあるが、「屋根瓦が一時にどさっと崩れ落ちたところがあった」と話された。

播磨各地の役所、寺院は9世紀終わりごろまでに廃絶したものが多く、それはこの貞観大地震の被災から再興できなかったと見る研究者が少なくない。

姫路市飾磨区の「南通り遺跡」では2002年



小野市南部を走る
山崎断層帯の三木断層(赤線部分)
=小野市ホームページ「防災ガイドブック」より

に液状化現象に伴う噴砂跡が見つかった。当時の県埋蔵文化財調査事務所が発掘調査したものだが、貞観の大地震によるものと判断した。この古代集落は地震で壊滅したようだ。

ただ、好古館によると、これまでのところ、小野市内では貞観大地震の痕跡は確認されていないという。

この地震は山崎断層が動いたことに起因するとされる。山崎断層帯の三木断層は、小野市内を走る。2か所ほど視認できる地点がある

ようだが、市役所で「素人では無理」と言われたので、現地確認はあきらめた。

「関西に地震は起きない」という神話は、16年前に完全に崩れた。貞観地震からすでに千年以上たつ。山崎断層は「いつ地震が起きてもおかしくない」状況という。

「地震考古学」という学問分野もある。近い将来の山崎断層地震に備え、謙虚に歴史にも目を向けるべきだろう。

小野市のホームページ上の市長コラム(6月1日付)で蓬萊市長が「災害への備えを万全に」と説いておられる。あわせてご覧いただければと思う。

「広報アドバイザー佐野九彦のおの歴史散歩」



中世から近世への渡し舟 河合の「太閤渡し」



NHKの大河ドラマ「江」はこの拙文を書き始めた週は、太閤秀吉の朝鮮出兵を軸に描かれていた。皆様ご存知のように秀吉は播磨と縁が深く、江を演ずる女優、上野樹里さんは加古川市出身だ。小野藩主の一柳家とも一方ならぬ縁のある秀吉にちなみ、今月は

小野の史跡「太閤渡し」について紹介したい。

筆者が太閤渡しを知ったのは、2004年、西脇に赴任して間もなく好古館で「太閤丸」という渡し舟を見たときで、渡し舟にかかわる三木合戦時の秀吉の文書があるのも知った。当初、「偽文書では」とも疑ったが、好古館から話を聞くうち、「本物でよし」と思うようになった。

文書は地元の旧家に代々伝えられてきたもので、秀吉の加古川渡河の事実は江戸時代の地誌「播磨鑑」にも記載され、大正時代の「加東郡誌」も疑うことなく採用している。

「小野市史」の編纂段階でも文書の真贋を問う意見は出なかったという。

さて、その文書だが、短行なので「小野市史・史料編Ⅰ」により全文を紹介する。

河井郷しんへい(新部)村船頭=四人者、
人夫令免除候之間、可得其意也、

九月五日 秀吉(花押)

河井郷しんへい村 山田新介

秀吉が新部村の船頭4人に人夫役を免除したというだけの証文だが、地元ではこれが山田新介らがかだを作って秀吉の軍勢を渡河させた礼に渡し舟運行の許可を与えた「太閤様御免状」として伝えられている。

年号の記載はないが、古くから天正6

(1578)年のものとされている。この時期、秀吉は織田信長の命で、姫路城を拠点に播磨攻略に専念していた。播磨における最大の敵は三木城に拠る別所氏だった。

三木城攻めには北播磨の制圧も重要だったようで、秀吉軍は姫路から小野に進出、北播磨の拠点だった河合地域を押さえて、加古川を渡り、豊地城などを制圧したようだ。この北播磨攻略もテコになり天正8(1580)年、三木城はついに落城する。

秀吉による同年の「播磨国中城割り」では一柳家のご先祖、直末が豊地城破却の担当武将に命じられているのが興味深い。

私の親しい城郭史研究家が「秀吉による三木落城で播磨の中世が幕を閉じ、秀吉の姫路築城で播磨の近世が幕を開けた」と話したことがある。とすると、新部での秀吉軍渡河が播磨近世への渡し舟になったとも言えそうだ。

好古館によると、加古川と東条川が合流する河合・新

部あたりは、水運の要所であるだけでなく、姫路と京都・大阪方面を結ぶ街道のルートでもあった。つまり播磨内陸部での水運・陸運両方の要所であったという。山田新介はたんなる船頭でなく、水運も掌握していた土豪ではなかったかと言われる。

太閤渡しは昭和40年ごろまで存続していたという。4、5年前、市長が筆者との雑談の中で、「何かのイベントで1日だけでもいいから“太閤の渡し”を復活させたい」と話された。渡し舟復活はまだだが、地域の憩いの場「太閤の渡し」が2008年春、オープンし、地域コミュニティの渡し舟の役割を果たしている。



太閤渡しの標柱(手前)、後方は加古川=河合中町

「広報アドバイザー 佐野 允彦の
おの歴史散歩」



金鐘城跡の「荒城の月」

つむもの 兵どもが夢の跡



広報おの8月号の本コラムはNHKの大河ドラマ「江」にちなみ、秀吉ゆかりの史跡「太閤渡し」について書いた。その中で水陸両方の交通の要所としての河合地区に注目した。だが、あの限られた地域にかなりの規模を誇る河合、堀井、小堀という3つもの戦国城館が並存していた不思議さには紙幅の都合で触れることができなかった。

さらに、これら3城が平地の城館であるのに対し、近くの青野ヶ原台地の先端部には山城の金鐘城があったのも興味深い。9月10日にはこの城跡で観月茶会も開かれる。今月は金鐘城を訪ねよう。

この城跡の概要が明らかになったのは、1991年～93年の市教委による発掘調査のおかげだ。城は主郭と西郭で構成され、その間には空堀があり、木橋が架けられていた。主郭の周囲は土塁が巡らされていた。北東部に突き出した尾根の先端部には櫓台があり、見張りのための櫓が設けられていた。

建物跡は4棟分が確認された。建物は新旧2期に分かれ、古いものは15世紀を中心とし、赤松氏の家臣、中村氏が城主時代のもの、新しいものは16世紀中ごろで、三木・別所氏支配下のものと見られる。

以前、そもそも山すそから10分ほどで上れる城が山城かという議論があったようだ。

しかし、城跡に立つとわかるが、平地からの比高差は約60mあり、三方が崖という要害の地だ。小堀、堀井、河合の3城を眼下に見下ろし、加古川流域を視野におさめ、遠くは加

東市、加古川市などの山々も見渡すことができる。まさに立派な山城だ。

おそらく金鐘城は平地の3城の詰城的機能を持ち、戦国時代末期、すなわち秀吉による播州攻めに対抗し、別所氏側が大改修したが、三木落城(1580年)により廃絶したのではないだろうか。

この城跡で面白いのは、城跡の遺構面の下層から弥生時代の遺構が見つかったことだ。発掘にあたった好古館の職員は丸いくぼみを検出したとき、城の名前にかかわる伝承の井戸跡かと思った。実はこれが弥生中期(1世紀ごろ)の竪穴住居跡だったのだ。住居跡は計6基見つかった。ここは弥生の「高地性集落」跡でもあったのだ。

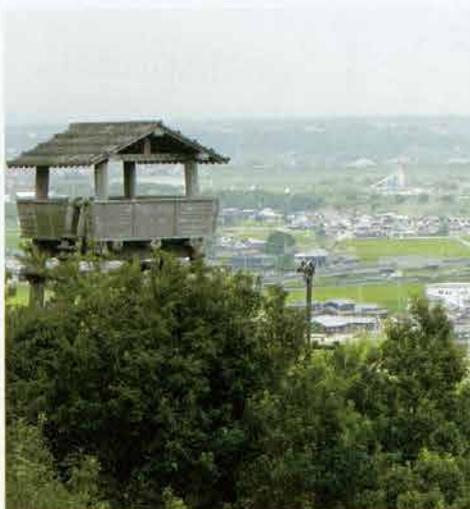
高地性集落は山や丘陵上に築かれ、周囲を見張り、のろしなどを使って非常事態を知らせたり、緊急時の避難所にもなる場所だ。おおむね「倭国大乱」の時代に築かれ、防衛

機能が高く、弓矢の石鏃などが出土する。ここでは山城の築城時に破壊されたらしく、のろし台は見つからなかったが、石鏃が出土した。おそらく平地の大寺遺跡の集落を守るための見張り所だったのだろう。

この金鐘は弥生の砦、戦国の詰城、さらには近代(明治～戦前)の旧陸軍演習場と中断・中絶はあるが、古代から近代までの約2千年間に及ぶ注目すべき遺跡である。

城跡と言えば、滋賀県・近江八幡支局勤務時代、安土城のイベントを企画、天主跡で著名な考古学者、佐原真さん(故人)のリードで「荒城の月」を歌ったことを思い出す。今年

は金鐘城跡で「荒城の月」を愛でながら、本コラムのレベル向上も願おう。



復元された戦国期の金鐘城跡の櫓
(昭和町の「夢の森公園」)



江戸・明治を生き抜いた武家 「小野藩家老の歴史物語」



「広報アドバイザー 佐野允彦の
おの歴史散歩」

日本史上最も有名な家老は、やはり播州・赤穂藩の大石内蔵助だろうか。次は越後・上杉家の直江兼統あたりか。本コラムのネタ探しに窮していたところ、好古館で企画展「小野藩家老伊藤家の歴史物語」が開かれた(8月6日から9月25日まで)。小野の歴史に

ついてはつまみ食い程度の知識しかない筆者には、伊藤家のことは初耳だった。展示内容はまことに興味深いもので、ご覧にならなかった方のためにも“家老の歴史物語”をいささかご紹介したい。

もともと一柳家の先祖には羽柴秀次の補佐役として「付家老」的役割をした直末、後見役を担った可遊もいて、家老職とは縁のある家柄だ。

さて、伊藤家は小野藩成立(1636年)当初から家老(中老)の家柄で、小野藩の領内政治に尽力した。伊藤家は小野高校前に屋敷があったが、昨夏、伝来の古文書類7000点以上、書籍約1190点、書画・道具類約370点が好古館に寄贈された。「小野市史」の編纂時には存在が知られていなかったもので、言わば新発見の貴重な資料群だ。

このうち今回は江戸中期の古文書から大正・昭和のマージャン牌まで82件が展示された。年代がわかる最古のものは、1734年の「諸役人心得之次第」。小野藩の家臣の区分(11階級)とそれに応じた職務などを細かく規定した文書で、貴重な史料という。1761年の「御定書」では、門番の廃止などの役所業務の改善や経費節減のほか、目安箱を毎月藩主(末栄)自ら閲覧するなどの改革案がわかる。

江戸後期の「野雉狩人数」は、軍事訓練を兼ねたキジ狩の人員編成の記録だ。家臣から村人まで含め総人数1223人にのぼる大規模なものだった。

狩りと言えば、小野・一柳家の親戚、伊予小松藩の一柳家も代々狩り好きだったことを最近手にした「伊予小松藩会所日記」(集英社新書)で知った。今年1月号の本コラムで小野藩の兎狩りと薬の「兎血丸」作りを紹介したが、伊予小松藩も兎狩りをし、「兎血丸」を作ったという。ちなみに会所日記を書き継いだのは伊予小松藩の家老だった。



小野藩家老・伊藤家の史料

播州そろばんが“出演”した映画「武士の家計簿」は、加賀藩会計係の家柄の当主が書き継いだ家計簿が原資料だ。伊藤家も代々、当主が家計簿を付けており、1864年の忠内の

「算用帳」と明治前半の欣平の「備忘録」が展示された。欣平はのち初代小野村長を務めた人だが、県庁用の草履、蛇の目傘の購入など細く記入している。炭酸ソーダー1瓶買ったのもハイカラな時代を反映しており、面白い。

欣平は明治維新後も小野など6地区の区長、加東郡役所の書記などを歴任、地方行政に手腕を発揮。弟の景治は新政府の軍人となり、西南戦争にも出陣するなど活躍している。幕末維新を生き抜いた小野藩の武家の歴史を垣間見ることができる。

伊藤家の文書群はこの先、解説を進めれば小野の近世・近代史をより多彩に描くことができる、貴重な玉手箱だ。5年後か10年後には先に紹介した「伊予小松藩会所日記」のような本にできるかもしれない。ただ、筆者は本コラム執筆のため家老に関する諸文献を調べたり、取材したりで、ちょっと過労気味だ。

「広報アドバイザー佐野允彦のおの歴史散歩」



殿様の子育て論 青少年健全育成月間に寄せて



親殺し・子殺し、児童虐待が絶えない、殺伐たる世の中だ。全国的に子どもから大人まで、ちょっとした我慢ができず、逆切れしての事件も相次いでいる。

だが、かつて小野藩・一柳家には我が子に質素・儉約、思いやり、堪忍の大切さを説き、子どもの個性による教育を心がけ、実践した殿様がいた。今月は全国青少年健全育成月間、児童虐待防止推進月間でもあり、“殿様の子育て論”を紹介したい。

この殿様は4代藩主・末栄(1731~1799年)。藩主自ら質素儉約に努め、困窮していた藩財政を再建、領民を慈しんだ名君と称えられる。3男4女に恵まれ、家庭においても慈愛深い父だったという。

その子育て論をまとめたのが1769年の「末栄様 御子様方へ御教訓書」だ。「小野市史」「小野藩史事典」などの助けを借りながら、簡単に内容を説明したい。

まず、この教訓書を通じて一貫して説いているのは、「堪忍」の徳だ。冒頭から「貴賤ともに堪忍というものなくしてかなわざる」と説き、幼年のころから堪忍の修行が肝要であると強調する。

具体的には、大名と言えど質素儉約に努め、食事一つでも麦飯に葉大根でも事足りるとする。道具・衣類万端にも贅沢を言わず、堪忍せよと諭す。グルメに走ったり、我慢できずカードで買いまくったりする現代人は、傾聴すべき教えだろう。

また、幼少より我がままに育ち、堪忍のできぬ大名は下々を思いやり、憐れむことがで

きず、家来をも虫けらのように扱うと批判。稽古事に精を出し、心身ともに隙がなければ身も健やかに、堅固になるとも教える。

自ら「大名育ち」で成人したことを反省した上で、我が子にまずは「ならぬことはならぬ」「あしきことはせぬ」と覚えさせたい、と述べる。「ならぬことはならぬ」というのは、東北・会津藩でも藩士の子弟に「掟」として教えており、近年福島県では、頭文字を取ったNN運動が展開されているようだ。

さらに、「子供を育てるには、人々(各人)の気質によって、さまざま差引あるべきこと」と諭すが、これは子どもの個性によってしつけ、教育をすべきと説いたものだ。

一柳家の子孫で、近江兄弟社学園を創設した一柳満喜子さんの「児

童の内的可能性を引き出す教育」にもつながろうし、「小野市民憲章」が掲げる項目にも通じる。総じて殿様による「教育勅語」と言えるほどの内容だ。

末栄は小野藩史上、藩中興の名君とされ、陣屋跡に建つ小野小学校は校歌で「末栄弘庵隆正とすぐれた人の数多く」と歌う。だが、小野小OBの知人によると、「学校では御教訓書のこと末栄のことも教わったことがない」という。長年、市内の中学校の先生だった好古館長・石野茂三さんも「学校教育やPTA研修で取り上げられたこともない」と話す。

せっかくの素材がもったいないことだ。現代的観点から「御教訓書」を再検証、再評価した上で、できれば市内の学校で何らかの形で取り上げていただきたいものだ。「教育現場を知らない素人の勝手な言い分だ」とお怒りの先生がいたら、末栄の「堪忍の戒」に免じてご堪忍を！



一柳末栄の「御教訓書」=好古館提供



「討ち入りでござる」 忠臣蔵と捕虜と

「広報アドバイザー佐野允彦の
おの歴史散歩」

「おのおの方、討ち入りでござる」。早いもので今年ももう12月。師走とくればクリスマス、じゃなくて「忠臣蔵」で、14日が義士祭だ。「小野とは関係ないだろ」と言われるあなた、ちょっと待って。冒頭の有名なせりふには「おの」が二つも。これは冗談。

実は小野市内には赤穂藩の飛び地の所領があった。これは後述。まずは捕虜と忠臣蔵の話から。

10月16日、エクラホールで催された青野原俘虜収容所再現コンサートで、神戸大学交響楽団により「交響詩忠臣蔵序曲」が演奏された。青野原収容所(1915～1919年)に第1次世界大戦のドイツ、オーストリア・



青野原収容所楽団

ハンガリー兵士の捕虜約490人がいたのは、大方の市民はご存知の話。

だが、この序曲が最初に演奏されたのは青野原でなく、徳島県の板東俘虜収容所だった。作曲者は神戸市在住のドイツ人、ハンス・ラムゼーガー(1867～1933年)。明治から昭和初年にかけて、貿易業を営むかたわら、作曲やバイオリンの指導などをしていた。「忠臣蔵」に関心を持ち、歌舞伎なども観劇、赤穂義士への共感のもと、交響詩を作曲したようだ。恐らくヨーロッパの騎士道と日本の武士道に相通じるものを感じたのだろう。

彼のもとで働いたことのある甥が板東収容所で捕虜になっており、慰問や支援活動を続けていた縁で、捕虜たちの楽団により1917年、演奏された。その後、1987年、徳島交響楽団が再演、小野が3回目。荘厳な中に、悲しみや哀愁を感じさせる曲調だった。

板東は日本でのベートーベン「第九」初演の

地で有名だが、青野原でも捕虜たちが楽器演奏を楽しみ、周辺住民にも開放して演奏会も開いていた。捕虜たちはバイオリンやチェロ、ギターなど楽器も自作していた。慈善演奏会(1919年)のチラシや展覧会の出品リストが残っている。

そもそも小野と「忠臣蔵」が無縁でなかったことも今回はじめて知った。赤穂浅野家の分家、家原浅野家が加東市(旧社町)に陣屋を構え、観音寺には義士の石碑が立ち、毎年義士祭が催されている。これはかつて何回か取材したことがあり、承知していた。

しかし、うかつにも小野市域を含む加東郡内に24か村、8200石の赤穂藩の所領があり、それを治める加東郡代をなんと吉田忠左衛門が務めていたのは知らなかった。吉田は文武両道に秀で、家老・大石内蔵助の相談役であり、吉良邸討ち入りのときは62歳で、裏門組の指揮官を務めた。

吉田は主君長矩の江戸城中での刃傷事件の知らせを加東郡代の役所(旧滝野町穂積)で聞き、赤穂城での評定に駆けつけたようだ。赤穂に残る史料によると、「在加東」の藩士13人中5人が討ち入りに参加している。

吉田忠左衛門の「潜居跡」が所領の一つである黍田町にあると聞き、現地を訪ねた。鬱蒼とした屋敷林のある家で、家人によると、江戸時代は庄屋だった屋敷に、城明け渡しから討ち入りまでの一時期、吉田と寺坂吉右衛門が隠れ住んでいたという。その間、庭や茶室をつくったと伝え、そのときのものという石灯籠が残されていた。

今回の取材を通じ小野と赤穂事件とが意外と縁があることがわかった。だから歴史散歩は面白い。さて今年の本欄はこれにて打ち止めでござる。

「広報アドバイザー佐野允彦のおの歴史散歩」



気運は隆々、干支は竜(辰) 小野の龍伝説と文化財



垣田神社の龍頭彫刻

市民の皆様、あけましておめでとうございます。正月の本コラムは、干支にちなみ小野市内に残る龍の伝説や文化財を訪ねよう。今年1年、市民の暮らしも市政も昇竜の勢いとなるように願って。

龍はもともと外来の想像上の霊獣。誕生の地は中国とされ、8000年程前にも遡ると

いう。殷・周の時代には青銅器などに龍の絵や文様が現れる。水や雨とかかわる神聖な生き物で、やがて王権と結びついていく。古代中国では皇帝のシンボルとなり、龍の子孫とする皇帝がいたり、皇帝の顔を「龍顔」と呼んだ。

日本へは弥生時代、朝鮮半島を経て龍の信仰がもたらされた。中国伝来の青銅鏡に龍の絵が施されており、やがて弥生土器に描かれるようになる。井戸や水辺での出土例があり、水神とされていたようだ。兵庫県内では神戸市・玉津田中遺跡のものなどが知られている。

6世紀に仏教が伝来すると、仏教思想の中の龍神信仰ももたらされ、やがて竜宮伝説も生まれる。多くの社寺で龍神が祀られ、雨乞い祭りと結びついていく。

小野には残念ながら古代に遡る龍の資料はなさそうだ。最古のものは、「龍翔ドーム」ができて有名になった、河合中町・八ヶ池の龍伝説だ。伝説を残す近くの慶徳寺に河合晃道住職(42)を訪ね、話を聴いた。同寺の開基、春庭見芳(しゅんてい・けんぼう)禅師にまつわるもので、15世紀前半の話だ。概略は下記の通りだ。

見芳師は徳が高く、説教も上手で、月2度の説教の日には信者が多数集まった。いつのころからか美しい婦人が加わり、1度も欠かさず

説教を聴くようになった。ある日、その婦人が「私は実は池に住む龍ですが、説教のおかげでもう少して人間に生まれ変われると悟ったが、いまだに迷いがとれません」と打ち明けた。そこで、見芳師が丁寧に仏の道を教諭すと、婦人は大変喜び、自分の体から7枚の鱗をはがし、静かに消え去った。

この龍のうろこが同寺の寺宝として特製の容器に入れられ、今も大切に伝えられている。私も拝観し、写真を撮らせていただいた。本堂の露柱の上には見事な龍の彫刻も施されている。

八ヶ池の名は「八大龍王」に由来するのかもしれない。

この伝説には後日談がある。「ふるさと伝え語り」(小野の歴史を知る会編著)によると、ある大日照りの年、一滴の雨も降らず、村人に泣きつかれた和尚が「龍の鱗」を思い出し、うろこを祭り、

雨乞いをする、大粒の雨が降り出し、村人は田植えをすることができたという。このほか、「大池の大へび」や「鐘掛けの松」も龍神にかかわる伝説と思われる。

市内にはほかの神社や寺院にも龍の彫刻がいくつかある。「小野市史別巻・文化財編」には、垂井の住吉神社、久保木の住吉神社、小野の垣田神社のものが紹介されている。いずれも江戸中期～後期の巧みな技で龍頭などが表現されている。初詣の日にでも探してみられてはいかが。

龍と言えば、昨年11月、来日したプータン国王は東北地方の被災地の小学校で「自分の中の龍を大事に育てなさい」と励ましたそう。プータン国旗に龍が描かれている。さわやかな青年国王は、「龍顔」にふさわしい印象だった。

本コラム、オチがなく、画龍点睛を欠いた。



八ヶ池と慶徳寺に伝わる龍のうろこ



平家のライバル、源義経 小野の伝説の地を訪ねて



「広報アドバイザー佐野允彦の
おの歴史散歩」

今年のNHK大河ドラマは「平清盛」だ。戦前・戦後はずいぶん悪役に見られていたが、近年は武家政治の先駆者として評価が変わってきた。私の大学の先輩である高橋昌明・神戸大名譽教授は、平氏政権を「六波羅幕府」とまで位置づけている。大河ドラマはどう

掛石、弁慶の重ね石、粉くい坂など義経伝説の旧跡が点在する。

榎山町在住の国井姓の一人で、「小野の歴史を知る会」副会長の国井正胤さん(76)も義経伝説を伝える。「今年、大河ドラマにちなんで、三草山から一の谷へのルートや伝説を私なりにまとめてみたい」と意気込む。

悲劇の英雄である義経への「判官びいき」から各地に様々な伝説が生まれたのであろう。ひょっとしたら後世の琵琶法師ら放浪の芸能

者がその土地その土地でリップサービスし、地元には合う義経伝説をばらまいていったのだろうか。または江戸時代に榎山村の有識者(庄屋・僧侶・神職ら)が租税免除目的や村おこしで義経伝説を作り上げたのかもしれない。だとすれば、なかなかの知恵者がいたものだ。

描くか、これから楽しみだ。

平家のライバルはもちろん源氏で、その主役は源義経。彼がどのようにドラマに登場するかも興味深い。さらには、三草山合戦(加東市)から神戸・一の谷へ向かう義経が描かれるのかどうかも関心のあるところだ。ドラマに先駆け、小野市内に残る義経伝説の地を訪ねてみよう。



源義経が腰掛けていっぶくしたと伝えられる「義経の腰掛石」=榎山町

平家追討の命を受けた義経軍が丹波路を駆けて三草山付近に到着したのは、「平家物語」によれば元暦元年(1184年)2月4日夜。すかさず夜襲をかけ、平家軍を敗走させた。次いで一の谷を目指し、軍を二分し、自らは播磨、摂津にまたがる山中に分け入る。ここからの義経軍の進軍ルートが不明だが、『小野市史』は「小野市域を通過していった」とみる。明確な根拠は示されていないが、榎山町あたりに点々と残る義経伝説の存在を無視できなかったのだろうか。

最も有名な伝説は、腹のすいた義経一行にハッタイ粉を与えた百姓家の老女の話だ。義経はお礼に「粉喰(国井)」姓を与え、年貢も免除したという。薬師堂の脇には「国位田碑」が立ち、碑文は読み取りにくい、「國位 源御守護神 免租地」と刻まれているという。このそばにあった国位田は明治9年まで租税が免除されていたそう。さらに付近には義経の腰

昨年未、神戸で開かれた平清盛シンポジウムに参加し、田辺真人・園田学園女子大名譽教授から三木市の判官神社の話聞いた。そこにも腹のすいた義経一行ににぎり飯を出したという伝説があり、地元の方は、義経主従が昨日通っていったかのように生き生きと話をしたそう。

小野の義経伝説の地でもこうあってほしいし、さらには地域おこしにつなげたいものだ。幸いに市観光協会ではすでに義経伝説マップを作成済みだし、ハッタイ粉を使ったクッキーも開発中だ。図書館では源平特集コーナーが設けられ、好古館ではコーナー展「義経がやってきた！」も始まった。

市民の皆様、この1年、「平清盛」ブームに負けず、小野の義経伝説の地を散策し、地域の歴史・伝説に思いを馳せられてはいかがでしょうか。

「広報アドバイザー」佐野允彦の
「おの歴史散歩」



「東大寺興亡にかかわる小野」 下司館跡と来迎寺を訪ねて



NHK大河ドラマ「平清盛」が始まった。初回の視聴率は史上三番目の低さだったそうだ。主役の松山ケンイチはなかなかのイケメンなのに、やはり清盛の悪役イメージが未だに払拭できていないのだろう。

平氏一族の中でもとりわけ評判が悪いのは、清盛の三男、重衡(しげひら)だ。反平家だった奈良の諸寺や町を焼く「南都焼き討ち」(1180年)を陣頭指揮したからだ。この焼き討ちでは大仏さまをはじめ東大寺もほとんど焼失した。焼き討ちの“実行犯”とされるのが、何と現在の市場小学校の南に館を構えていたと伝えられる下司(げし)友方だった。

このことは「広報おの」2月号『ひまわり見聞録』ですでに紹介されているが、少し補足したい。と言うのは、焼き討ち実行犯の地元で、東大寺再建にからんで浄土寺が創建されるという歴史の皮肉を感じるからだ。

下司は播磨国福井庄(姫路市網干周辺)の荘官(荘園の管理役)で、平氏の家人(家来)だった。播磨は忠盛、清盛と父子2代にわたり国守を務め、広大な所領を有し、のち浄土寺の経済的母体となる大部荘なども支配する。この過程で平氏は播磨国内の多くの武士を従えていった。下司もそんな在地武士の一人だったろう。

下司館の話に戻る。市場小の南に「下司」という字名を残す。『小野市史』は「字限図からは館を復元できない」とするものの、周辺に「土井開地」や「土井垣内」など館に関係する字を残していることを指摘。「小野市絵図集・本編」

もまた字名などから見て「中世の荘官及び土豪の館跡を想起させる」と述べている。

近くの名刹、来迎寺は東大寺復興の重源上人を開基と伝える。その弟子善阿が修行したという鉢泉「ブツブツ」が現存する。このことは本広報の2010年9月号で紹介した。来迎寺の縁起によると、善阿は下司友方の妹の子で、一族が仏罰により死亡したので重源の弟子となったと伝える。

ただ、仏罰というが、下司も重衡の命に従



下司一族ゆかりの来迎寺＝市場町

い町屋に火をかけ、それが寺々に延焼したものであり、平家勢力圏の東播磨の武士が平家勢への従軍、大将からの命令を拒否できる状況にはなからう。人気者の源義経にしても、三草山合戦(加東市)のとき、夜襲の灯りとするため小野原の民家を放火しながら進軍している。

さて、下司館跡だが、かつては一段高い場所と堀跡らしい低い田んぼがあったというが、ほ場整備のため消滅したそうだ。ほ場整備(1988年ごろ)の際、市教委が試掘調査をし、平安末期から鎌倉時代の堀跡や建物の柱穴、碗などの土器類を検出したという。注目されてよい資料だ。

実はここ10年ほど、東播磨地方で平安後期の武士の館跡と見られる遺跡が数ヶ所発掘されている。神戸市西区の玉津田中遺跡、上脇遺跡などだ。方形区画の屋敷地の中にコの字型に建物が配置され、中央に池のある庭も持つ屋敷が復元想定されている。中国製の青白磁、山城(京都)系の土器などが出土し、平家方の武士の館と推定されている。

土地に刻まれた資料(遺跡)から源平時代の地方武士の姿がより具体的に描かれる日がくるかもしれない。

「広報アドバイザー 佐野允彦の
おの歴史散歩」



元祖「民間活力の導入」 小野陣屋町を訪ねて



小野町惣絵図(部分)

3月3～4日、小野商店街一帯は「小野陣屋まつり」でにぎわった。好古館では4月8日まで「小野藩陣屋と陣屋町の歴史」展も開かれている。この機会に陣屋町を訪ねた。

寛永20(1643)年、1万石の小野藩が成立し、藩主直次は敷地の陣屋(大部小学校付近)に入った。その後門前村(小野小学校周辺)への移転を計画。新陣屋・御殿、藩主屋敷を構え、あわせて陣屋を核にした町場(陣屋町)を整備、1653年に移転する。

幕藩体制下では所領1万石では城を構えることができない定めであった。しかし、小野藩ではできるだけ防御の備えもできる台地上で、回りにがけや池のある要害の地を選んだのだろう。陣屋近くの道路はT字路やかぎ型に屈折させるなど軍勢の直進を阻む工夫をしている。

町場はほぼ南北に一直線に走る新道(現在の小野商店街)を機軸に町割り(都市計画)がされた。この町づくりを藩命により担当したのが、姫路城下の商人、三宅新右衛門(清昌)だった。三宅家の「覚」などによると、町家と新道の建設だけでなく、陣屋・武家町も含め新町の建設全般を請け負ったようだ。

まさに「民間活力の導入」の先駆けであろう。三宅家は整備事業のためかなりの労力と経費も負担したと推察される。その見返りとして藩は三宅家に領内での酒造業の独占権を認めている。行政と民間企業のギブアンドテークだった。

主な町家は新道に面して建てられ、間口が狭く奥行きの高いウナギの寝床型だった。近

年、家老の伊藤家所蔵文書から各家の間口・奥行きが記された史料(1747年)が見つかった。陣屋展にも出展されている。

陣屋まつりでは愛宕神社でも催しがあり、にぎわったが、この神社境内に有力町人が務める町役人の会所があった。

天保9(1838)年4月、陣屋内の湯殿から出火、武家屋敷のほか町家多数を焼失する大火が起きた。復旧・復興に困窮し、町役人も町政の経費捻出のため同12年、芝居興行を藩に願い出て許可され、催行した。焼失した町会所の造作費に充てるため、弘化4(1847)年にも浄瑠璃・

物まね興行をしている。木戸銭収入を町の復興・復旧に充てるもので、チャリティショーの先駆けと言えそうだ。

大火の前後、町年寄を務めていた薬屋忠左衛門の手控(書類)が「小野の古文書を読む会」によって近年解読され、「小野史談」第58号に発表された。これを見

ると、町役人が今の市役所や警察などの官公庁の扱うかなりの仕事を担っていたことがわかる。大酒を飲んでトラブルを起こした男の自宅謹慎処分免除の世話を焼き、困窮する80代の独居老人に対し藩に生活保護(お救い米)の申請もして、米3斗を貰い受けている。

町役人の仕事振りは市民の参画・協働を標榜する小野市政の歴史的土壌になっているようだ。町衆が開いた陣屋町の歴史にちなみ、7回目になる陣屋まつりも地域住民の手で運営された。催しでは陣屋町をテーマにしたクイズ形式のウォークラリーもあった。来年は小野陣屋と陣屋町完成からちょうど360年を迎える。とりわけ盛大な陣屋まつりを期待したいものだ。



町会所のあった愛宕神社(左側)も陣屋町の面影を残す＝小野商店街

「広報アドバイザー」佐野允彦の
「おの歴史散歩」



小野から「大塩の乱」に参加 掘井儀三郎をしのお



大坂町奉行所の名与力だった大塩平八郎(中斎)が天保8(1837)年2月、同志・門弟らとともに決起した、いわゆる「大塩平八郎の乱」。江戸後期の幕藩体制を揺るがせ、明治維新に向かううねりの先触れとの評価もあるこの乱に、小野から参加した青年がいた。大砲まで撃ち放す市街戦となったが、わずか半日で鎮圧された。青年、掘井儀三郎は逃走するが、奈良で捕えられ、刑死した。同年5月10日(旧暦)のことだ。今日は命日にちなみ儀三郎をしのおぼう。

儀三郎に関する伝記の類はない。わずかな手がかりの一つは、出身地(河合西町)に近い青野ヶ原に立つ招魂碑だ。その碑文によると、文化14(1817)年生まれで、8歳から地元の僧侶や医師らに字や書を習い、天保5(1834)年、大塩の私塾「洗心洞」の門弟となった。ただ、高名な歴史学者、幸田成友の名著「大塩平八郎」は同7年の入門とする。

同書はまた彼を「百姓の倅」と記すが、並の百姓の倅が子どものころから学問を学び、さらに大塩の塾に遊学できるはずがない。子孫の掘井陽彦さん(60)＝河合西町在住＝によると、「掘井家の先祖は堀井城の城主。江戸時代は庄屋で、地主だった」そうで、裕福な農家だったようだ。

ちなみに天保4年、加古川筋に大規模な一揆が起き、一族の与七郎家(酒造、金貸し、干鰯屋)も襲われた。この一揆は米価高騰を受けた米の買占めを阻もうとするものだった。「小野市史」はこの一揆を「関東・東海地方よりも早い時期に発生した世直し一揆」と評価している。

これを身近に見聞したことが儀三郎が大塩塾に入門する一因となったという見方もある。

興味深いのは、大塩がこの一揆に関心を寄せていたことだ。大坂町奉行所は大坂近郊の藩領や旗本領などの領域を越える広域行政も担っており、与力時代の儀三郎は加東郡の「三草山争論」を担当するなど東播地方の事情に通じていたという。

さらに、大塩は4年後輩の与力、内山彦次郎をライバル視しており、彼の不正・疑惑を糾弾することも決起の一因だったらしい。例えば天保の大飢饉で困窮する庶民をよそに、内山は大坂西町奉行の命で兵庫津で

買った米を江戸に送り、大塩の反感を買った。

さて、大塩の乱に話を戻そう。入門後の儀三郎は大塩塾に寄宿し、平八郎の身近に仕えていたという。このため平八郎の思想信条、人格により魅かれていたのだろう。決起の際は先備、中備、後備の三段構えの陣容の中で中備のうちの一隊の組頭を務めたようだ。



青野ヶ原に立つ掘井儀三郎の招魂碑

小野に残る儀三郎の史料(資料)は、招魂碑ぐらいしかなく、ぜひにも現物が見たくて、掘井さんに案内していただいた。碑の場所は陸上自衛隊青野原駐屯地の演習場内で、「関係者以外立ち入り禁止」。碑は生い茂る草木の中にひっそり建っていた。

掘井一族の堀井(河合)半介(当時、加東郡長)らが明治13(1880)年に建立。ところどころ苔むす碑文を見ながら、「義拳」に投じた21歳の青年に思いをはせた。

(なお、掘井儀三郎の姓名については「堀井」「義三郎」という混同・混用があるが、今回は「小野市史」の表記に拠った。)

「広報アドバイザー 佐野 允彦の
おの歴史散歩」



古代の造船集団 船木連の故地を探る



船木町の標識

水辺や海辺が恋しい季節。播磨灘を行きかう船影を眺めるのも楽しい。奈良時代、播磨灘を航行した遣唐使船(752年)に「播磨」、「速鳥」(はやどり)と名づけられた船があった。内陸部にある小野と船に何の関係があらうかと奇異に思われるかもしれない。今月は古代史の波に漂い、これらの遣唐

使船を造った造船集団が「船木連(ふなきのむらじ)」であり、その根拠地の1つが実は小野市船木町あたりだったという大胆な仮説を披露したい。

古代、海の神様、航海守護神を祭る住吉大社(大阪)の神領とされる杣(そま)山が賀茂郡・椅鹿(はしか)山にあった。「住吉大社神代記」によると、もとは船木連の先祖が領していた山で、神功皇后の朝鮮出兵の際、この山林の材木で船を造り、献上したという伝承がある。

この椅鹿山は「播磨国風土記」に記された「端鹿里」を中心にした山林とされる。加古川の支流、東条川(端鹿川)の流域にあたり、いまでもこの地域には住吉神社が点在し、古代以来の住吉大社との関係をしのばせる。東条川沿いではないが、加古川に合流する直前の万勝寺川沿いに鎮座する垂井町の住吉神社を見るたび、絶妙の立地を思うのである。

この椅鹿山を管理し、そこで伐採した木材を用い造船をしたのが船木連であったろう。この船材の搬出には東条川—加古川水系が利用され、造船所は加古川下流の鹿子水門(かこのみなと)が明石湊にあったと推察される。住吉大社神代記には「鹿児浜」の由来や、明石郡

にも住吉大社の神領があったことが記されているからだ。この明石の神領は、現在の明石市船上町あたりで、船木に由来する地名とされる。

風土記によると、古代山陽道の明石駅(うまや)にあった大木で造られた船の名前が「速鳥」で、明石の水を難波の都に毎日運ぶ快速船だった。古記録でわかる我が国でも最古級の船名で、それが奈良時代の遣唐使の船名に復活したわけで、播磨国と船の古い歴史を物語る。

船木町から中番町に広がる「船木・中番古墳群」は、船木連一族の墓域と推定されるが、その年代は5世紀末から7世紀後半と見られている。

かつては100基を越す古墳がある一大古墳群だったが、戦前戦後の開発・開墾で現存するのはわずかに数基という。

そのうちの妙見塚古墳は、市内ただ1つの前方後円墳だ。コミセン下東条のすぐ南にある。墳丘の長さ約35m、高さ4mで、周濠を巡らし、埴輪を立てていたらしい。現状はこんもりした雑木林だ。市



妙見塚古墳

による石碑が立つ。

この妙見塚が5世紀末～6世紀初めの築造で、古墳の主はこの地に進出した船木連の有力者と見られる。その後百数十年にわたり船木連一族の墓が船木・中番地区に連綿と築かれていったのだろう。

古文献や地名、神社などから見て船木・中番地区を船木連の根拠地とみる研究者は少なくない。ただし、今のところずばり裏付ける物証がない。例えば船の埴輪、船を描いた土器、船木連と書かれた木簡や墨書土器などの考古資料が見つかれば、その可能性はぐんと高くなる。これらの物証が得られる日が小野古代史の新しい船出の日になるろう。

「広報アドバイザー佐野允彦のおの歴史散歩」



後期古墳群を探る 好古館での発掘展に寄せて



勝手野6号墳の装飾付須恵器
(県立考古博物館蔵)

今月は7日から好古館で県立考古博物館と共催のふるさと発掘展「後期古墳の世界～横穴式石室と木棺直葬～」が開かれるのにちなみ、二葉町の焼山古墳群と黍田町の勝手野古墳群を紹介したい。

小野市域は東播磨きっての古墳の宝庫。数十基以上でグループを形成する古墳群がいくつもある。

特に後期(6世紀初め～7世紀後半)の古墳群で主に小規模な円墳・方墳多数で密集的に形成されたものを「群集墳」と呼ぶ。焼山と勝手野はこの群集墳に分類されるが、県外にも知られた古墳群だ。

焼山が有名なのは、戦後の文化財保存運動の先駆けの1つであることなどからだ。また、遺体を納める埋葬部が木棺直葬による群集墳のほうが横穴式石室のものに先行することを明らかにした成果も重要だ。

「小野市史」などをもとにかいつまんで説明しよう。万勝寺川と山田川に挟まれた段丘上に150基ほどの古墳が築かれていた。それが戦後、壁土の採取や農地開拓で次々に破壊されていった。保存の掛け声を上げたのは加西市出身の赤松啓介さん(故人)だった。在野の研究者ながら群集墳研究の先駆者の1人である。保存運動は全国に広がり、県は開拓工事を中止、昭和33年に調査を実施した。

首長墓(5世紀末)と見られる帆立貝形古墳2基が残る。これ以外の小円墳(6世紀代)は有力農家の墓だろう。円墳2基を含む計4基が県の史跡に指定されている。

1つの墳丘に複数の木棺が埋められていた。

全国的には6世紀以降、横穴式石室が主流になる。だが、東播磨、特に小野市では木棺直葬が多いのが特徴で、焼山はすべてが木棺直葬だ。これは古墳を築造した人たちの階層(身分)、財力の差異なのか、葬送思想の違いなのか、単に石材の入手の難易によるものが、私にはよくわからない。この謎解きのカギが今回の古墳展でどれだけ提示されるか楽しみだ。

勝手野古墳群(円墳11基)は調査された8基すべてが横穴式石室だった。加古川左岸の山裾に営まれており、山陽自動車道の建設に伴い1995年に県教委が調査した。時期は6世紀末から7世紀前半ごろ。特に注目を浴びたのが金銅装の馬具一式を副葬した3号墳と、装飾付須恵器2個を石室前に立てていた6号墳だ。

この装飾は人物や動物の小像を壺の周りに付けたもので、騎馬による鹿・猪狩りの様子や行司もいる相撲の情景などを表現している。古墳の被葬者である首長の生前の様子を

再現したものとか、古事記や風土記に出てくるような伝承を具象化したものなどと言われた。私の恩師、森浩一・同志社大名譽教授はかつて「像が(壺の)円周上をめぐる回転木馬のようだ」と表現された。

好古館には普段レプリカしか展示されていないが、今回は本物が出品される。さらに小野を中心にまとまった古墳資料が展示されるのも平成10年以來のこと。ぜひこの展覧会を見学され、小野の古墳時代に思いをはせていただければと思う。

私事で恐縮だが、同展には私も会員である「ひょうご考古楽倶楽部」の仲間たちが作った古墳の模型なども展示される。



焼山古墳群の一部

「広報アドバイザー 佐野允彦のおの歴史散歩」



中世・大部荘を探る 米国でも関心高まる



河内楠入道らの非道を訴えた
大部庄百姓申状(『小野市史』)

好古館の西田猛・副館長が6月上旬、渡米した。南カリフォルニア大学で開かれた日本の荘園に関する研究会で、大部荘おおべのしやうについて発表するためだった。アメリカで日本の荘園研究が行われていること自体驚きだが、この学術会議のテーマが大部荘だったことも驚きとともに、誇らしい。今月末には地元で地域イベント「おおべのショー」も開かれるので、今月は大部荘の面影を探って歩こう。

そもそも小野の人たちはあまり強く認識されていないようだが、大部荘は全国に多数あった荘園の中でもベスト5に入るチョー有名な荘園なのだ。

その訳は、荘園領主だった奈良・東大寺と荘園管理事務所の役割も果たした小野・浄土寺の双方にかなりまとまった量の古文書が保存されていること、中世社会の新たな原動力となった「悪党」の活動がわかること、開発や圃場整備で様変わりしたが、丹念に観察すれば中世荘園の歴史的景観がある程度復原できることなどによる。このため、大部荘は荘園研究の格好の対象となっているのだ。

さて、大部荘の成立には最初から有名人がかかわる。重源上人だ。源平の争乱で焼失した東大寺再建の功労者だが、その再建事業の経済的基盤の一つとなったのが大部荘で、彼の活躍がなければ国宝・浄土寺も存在しなかったのである。

大部荘は1147年に東大寺領になり、荘園の四至(荘域)が定められたが、東限の「大墓」は浄土寺東南の高塚山古墳とされている。西は加古川で、東西約4*、南北約5*に及ぶ。現

在の小野地域の大部分を占めており、小野藩以前の小野のルーツは、大部荘と言ってよいだろう。一時、平家が支配し、平家滅亡後は源氏の武将、梶原景時が知行したこともある。

再び東大寺領となるのは1192年で、重源の指導の下、「鹿野原」(浄谷、中島、黒川、広渡町あたり)と呼ばれていた原野の開発が進められた。水利の悪い台地上にあったため、治水灌漑が必要で、重源がため池をつくり、開墾が進んだという伝承が残る。浄土寺南西の地藏池(濁り池)もそんな重源伝承の池だ。浄土寺の真西の北池なども大部荘開発にかかわるものとされている。



重源の伝承が残るにぎり池(浄谷町)

「浄谷遺跡」も荘園開発にかかわる集落遺跡だ。米国での発表中、考古学的立場での発表は西田さん一人で、「考古学の成果から見た大部荘」には質問が相次いだという。

大部荘の歴史的展開の中で、「悪党」の活動も重要だ。特に1295年に「大部庄百姓等」から様々な非法をしたと訴えられた「河内楠入道」は、南北朝時代の英雄、楠木正成の父が一族とされている。

このときの主犯格、垂水繁昌は前年、悪党多数を率いて大部荘に乱入し、年貢米や牛馬まで強奪した人物で、「朝日 日本歴史人物事典」にも載るほどの有名人だ。悪党については「峯相記」という中世播磨の地誌・史書に詳しい記述がある。この書は今般、国の重要文化財に指定された。

観光的には浄土寺ばかりが脚光を浴びているが、浄土寺を中心に大部荘という面的な歴史的景観の活用も望まれる。南カリフォルニア大学では浄土寺や大部荘関係の史料の英訳が進んでいるという。研究でも保存活用でもアメリカに負けておられない。

「広報アドバイザー」佐野允彦の
「おの歴史散歩」



「蓬莱」地名と姓を探る 神仙の理想郷を夢見て



古絵図に記された蓬莱野

現役の記事だったちょうど8年前の9月、転勤で北播磨(西脇支局)に赴任。小野市役所に挨拶に来たら、市長が「蓬莱さん」だった。「不老長寿の仙人が住む霊山。おめでたい名前ですね」と話すと、「よくご存知ですね」とほめられた(?)。

記者生活40年間で15回ほど西日本各地を転勤したが、蓬莱姓の人に出会ったのは初めてだった。河合中町には「蓬莱野」という小字名があることも知った。今月はそれ以来、気になっていた珍しい地名・姓の由来を探ってみよう。

私が蓬莱山のことを最初に知ったのは、学生時代、京都の社寺巡りをしていて、庭園の池に蓬莱山を模した岩(石)が配されていたのを見たときだ。蓬莱山にかかわる徐福伝説も知った。古代中国の秦・始皇帝の命で、方士(呪術者)の徐福が不老不死の薬を求め、船出し、たどり着いたのが日本だという伝説だ。和歌山県新宮市をはじめ各地に徐福渡来の伝説が残る。

小野の蓬莱(野)という地名・姓はいつ生まれたのだろうか？まず蓬莱市長を訪ねた。「由来はよくわからないが、慶徳寺(河合中町)からもらった姓だと伝え聞いている。先祖は造り酒屋で、昔は蓬莱野墓地あたりに数町歩の土地を持っていたらしい」と話された。

私は小野の蓬莱の由来を徐福伝説、神仙思想の導入とからませて、早ければ7世紀後半の「河合廃寺」、大部荘開発と関連すれば浄土寺、時代的・地理的には慶徳寺(1401年創建)のいずれかの僧侶が名付けたのではと推察していた。市長の話信じれば、慶徳寺説が浮上してくる。

好古館の石野茂三館長の教示で、「加東郡誌」に川合郷蓬莱村(蓬莱野)に「構城」という城があり、城主は蓬莱若狭守で、応仁のころ赤松政則に従ったと記されていることを知った。これが史実であれば、蓬莱姓と蓬莱野に関する最古の史料だが、信頼のおける史料では確認されていない。

石野館長によれば、江戸時代の「蓬莱野争論」に関係する一連の古文書が確かな史料だ。「小野市史」や「小野市絵図集」などによると、加古川の西岸にある草場である蓬莱野の利用を巡って度重なる争論が繰り広げられた。

近くに井堰(水の取入口)があったため、この井堰は加古川が濁水して水位が下がった場合、川に土嚢を積み上げ、水位を上げて取水するようになっていた。その土嚢に使う土芝を取る場所が蓬莱野だったという。

「大川筋河合川原争論裁許絵図」(1721年)には緑色に描

かれた蓬莱野がみえる。蓬莱野の中央に境界線が引かれ、北が福田郷、南が河合郷と区別されている。

市民の皆様よくご存じの河合運動広場の北側に位置する。現在は地元の墓地管理組合で管理する「蓬莱野墓地」になっている。南にはこんもりと木が茂る林もある。たぶん古絵図に記された松林なのだろう。

蓬莱山については古来「天の川」にあった神仙境とする伝承もあった。それゆえ、中国や日本の古典にも通じていたはずの慶徳寺の高僧が、川のそばの大事な野原ということで「蓬莱野」と名付けたのでは、と想像する。蓬莱の故事を思いつつ、小野市全体が蓬莱山のような理想郷になればと願う。



蓬莱野の名残の蓬莱野墓地(河合中町)

「広報アドバイザー佐野允彦のおの歴史散歩」



重源上人と浄土寺を訪ねる 奈良博での特別展を見て

朝日新聞の紙面(8月7日付)で、重源上人坐像(国宝、東大寺蔵)の後ろに浄土寺の阿弥陀如来立像(重文)が控える写真を見つけた。奈良国立博物館の特別展「頼朝と重源」の会場光景だった。「これは見逃せない」と9月17日の閉幕前に駆け込み、観覧してきた。

会場に入ると、重源像の前にこれも浄土寺蔵の金銅三角五輪塔が展示されていた。つまり、五輪塔—重源像—阿弥陀像とほぼ一直線に並んでいたのだ。阿弥陀像の左右にはやはり同寺蔵の菩薩面各3面が飾られていた。この一画は重源像を中心に浄土寺コーナーのような観を呈していた。

重源と浄土寺については広報おの8月号でも少し触れたし、小野市民には“釈迦に説法”なので、詳しく述べない。重源は単に名僧・高僧であるだけでなく、莊園経営の優れた実業家であり、大寺院復興の名プロデューサーであった。

浄土寺・浄土堂とそこにまつられた阿弥陀三尊立像を絶賛する学者・文化人は枚挙にいとまがない。近年では建築家、安藤忠雄さんもその一人だ。私がテレビで見したのはNHK「国宝への旅」(1987年)だと思う。NHK取材班の粘りと撮影技術で夕方、お堂の部戸から差し込む西日を浴びて浮かび上がる三尊像の映像を見たときは、思わず正座して合掌したほどだ。取材班に同行した作家、安西篤子さんは「この世のものならぬ体験だった」と感動を記している。

たぶんこの放送がきっかけになったのだら

うが、全国的に一躍有名になり、観光バスが押し寄せるブームが起きた。しかし、私も何度か浄土寺を訪れているが、夕日に浮かぶ三尊像にはいまだお目にかかれていない。

浄土堂と薬師堂という東西軸に注目した研究者も少なくなく、「迎講」という仏事と関連付けた考察もある。

夕日は青野ヶ原丘陵の向こう、法華山あたりに沈んでいく。重源は小野に来たかどうか不明との見解もあるようだが、重源は浄谷の丘に立ち、現地を見たうえで堂と三尊像を一体化させた設計プランを入念に仏師快慶と詰めたはずだ。

重源は自らの浄土観を浄土寺という目に見えるかたちで表現したのだろう。

ちなみに東日本大震災以来、歴史上の大地震に関心が高まっているが、この三尊像は堂の床下で柱や地面と結び付けられており、いわゆる耐震構造になっている。

快慶は三尊像のほかに、迎講に使われる阿弥陀如来立像

と菩薩面も作っている。今般、奈良国立博物館に出品されたものだ。

実は浄土寺の創建年代については、寺伝の建久8(1197)年のほか諸説あるが、近年、寺に保存されていた古材を年輪年代測定法で調べ、伐採年代はずばり1195年と、1195年か96年との結果が出された。しかも産地が周防(山口県)ともわかり、伝承を裏付けた。

再来年の2014年は浄土堂上棟(1194年)から820年の節目だ。「小野史談」に大部荘や浄土寺についての論考を発表した八代醒ひとみさんや山田貴生さんら若手の研究者も輩出している。重源上人、浄土寺、大部荘といった小野の宝をさらに大切にしていきたいものだ。



重源上人坐像の後ろに阿弥陀如来立像が並んだ
—奈良国立博物館提供

「広報アドバイザー佐野允彦の
おの歴史散歩」



そのころの小野は？
「卑弥呼がいた時代」展に寄せて



大島大坪遺跡の復元想定図

県立考古博物館(播磨町)が開館5周年記念で「卑弥呼がいた時代」と題する特別展を12月2日まで開いている。女王卑弥呼を倭国王として戴く古代王権の時代だ。年代的には弥生時代後期から古墳時代初期にかけて(2世紀後半～3世紀中ごろ)の時代に焦点をあてた。残念ながら小野市からの出土品はないが、これを機に同時期の小野の姿を探ってみたい。

戦後間もなく弥生の農耕集落「登呂遺跡」(静岡県)が発見されたことで、弥生時代といえば「平和な農村」というイメージが定着した。しかし、ここ20～30年、日本各地で防御性の強い高地性集落や環濠集落の発見が相次ぎ、「戦争の時代」とみる時代観に変わってきた。

青野ヶ原丘陵の突端にある金罐城遺跡(昭和町・夢の森公園)は、播磨でも有名な高地性集落だ。卑弥呼の登場より100年ほど早い(1世紀中ごろ)が、外来の勢力の侵入を見張る砦のような場所で、異変などをよそに伝える情報伝達の機能を持っていたと見られる。平成3～5年度の発掘調査後、市教委はのろしを上げる復元図を描いた。

現地に行かればすぐにわかっただろうと思うが、台地は比高差が約60mあり、加古川流域がよく見渡せる要衝の地だ。竪穴住居6棟、弓矢に使う石鏃も出土した。「倭国大乱」(2世紀後半)と関係付ける見方もある。小田城遺跡(小田町)も高地性集落だ。

環濠集落は平地にあってもムラの周囲に濠を巡らした集落だ。小野では敷地西遺跡、垂

井遺跡、高田宮ノ後遺跡などが環濠集落と見られている。

敷地西、王子城ノ下、垂井遺跡では火事で焼失したと見られる住居跡も見つかっている。垂井遺跡では集落の西側を囲む溝2本が走り、その東側で焼失した竪穴住居が検出された。平面が五角形をした大型の竪穴住居も見つかった。この集落の有力者の住居と見られる。

焼失住居もかつては倭国大乱と結び付けられ、戦乱に伴う焼失と見られがちだった。近年は必ずしもそうでなく、小野の例も戦乱とは関係ない普通の火事のようなのだ。

ずばり卑弥呼と同時代と見られる環濠集落が、大島大坪遺跡(大島町)だ。好古館の西田猛副館長は「小さなムラが統合され、邪馬台国のようなクニが誕生する激動の時代に突如として出現した」と話す。幅3mほどの溝で集落を区切っており、竪穴住居94棟、掘立柱建物16棟を検出した。一時期に150人以上住んでいたと見られ、当時としては県内有数の大集落だ。

集落の北側には墓域があり、

穴を掘っただけの粗末な墓から方形周溝墓と呼ばれる立派な墓もあり、人々を支配する有力者の存在をうかがわせる。

現在、「大島大坪遺跡公園」となっており、そこに立つ説明板は「女王卑弥呼誕生までの道のりは遠い地域の歴史でなく、当市でもその影響下のもと同じ時の流れを歩んでいた」と記す。

「卑弥呼共立」(180年ごろ)には播磨、吉備、阿波・讃岐、近江などの諸勢力が加わったと見られる。小野の首長たちもそうした動きと無縁ではなかっただろう。



卑弥呼と同時代の環濠集落跡
「大島大坪遺跡公園」

「広報アドバイザー佐野允彦の
おの歴史散歩」



「播磨国風土記」に探る 古代の小野の姿

今年、古事記編纂1300年に当たる年で、奈良や出雲などではゆかりの展示会やイベントが盛んに催された。来年2013年は、「風土記」の編纂の官令が出された和銅6(713)年からちょうど1300年に当たる。諸国の風土記のうち我が「播磨国風土記」が完成したのは714年～715年とされる。折しも好古館で特別展「下東条の古代中世と住吉神社信仰」が開かれている。風土記に描かれた古代小野の姿を探ってみよう。

風土記のころ＝奈良時代の小野は、「賀毛郡」だった。応神天皇のときに、つがいの鴨が巢を作って卵を生んだから、と郡名の由来が述べられている。この記事に続く上鴨・下鴨の里は現在の加西市域で、小野と直接関係はない。しかし、鴨池があるように小野にも古くから鴨が多くすむ池があったであろう。韓流ドラマの中の伝統的な結婚式でつがいの鴨の置物が飾られるのを見たが、日韓を問わずつがいの鴨は印象深い鳥なのだろう。

動物つながりでいうと、猪飼野の地名伝承も興味深い。風土記では猪は鹿に次いで記載が多い。風土記の記述によると、仁徳天皇の時代に、日向(南九州)の肥人、朝戸君という豪族が天照大神を祭る舟の上に猪を乗せてきて献上し、「飼う場所がほしい」と申し出て、賜った土地で猪を放って飼ったので「猪飼野」と名付けられたという話だ。

この話は日向の豪族と仁徳朝の関係、天照大神をまつる舟、仁徳朝と播磨との関係、猪飼野のあり方など考えさせられる内容が多く含まれている。しかし、私にはこれらに詳し

く言及する学識がない。困ったときの恩師頼みで、森浩一著『日本の深層文化』の「猪と猪飼部」の項を参照させてもらう。

それによると、猪飼野は「小野市域あたりであろう」とし、「この猪飼(部)は鴨(賀毛)国造に属したのではないか。猪飼を持つことも豪族の権威を示す手段であったのであろう」という。そして猪飼部は「神への犠牲に用いる猪を飼育し、用意しつづける集団だった」と見ている。なかなか鋭い見解だと思う。風土記の記述からすると、猪飼野は「山田里」にあったと見られる。

猪というと、勝手野古墳群(黍田町)で出土した装飾付須恵器に狩猟の様子を表した小像群があり、猪もいたことを思い出す。この須恵器については広報7月号の本欄でも紹介したが、風土記の記述ともあわせ、様々なことを考えさせてくれる興味深い考古資料だ。

また、風土記には相争う村君を多数集めて皆殺しにした(臭江村＝黒川町)という恐ろしい話もある一方、伎須美野の地名由来のように美しい話もある。

風土記に記された地名が今も伝えられているのはうれしいことだ。

さて、特別展には風土記に直接かわる資料は出ていない。しかし所々に顔を出す神功皇后にちなむ絵巻や絵馬、住吉大神に関する資料が並ぶ。住吉大社(大阪)の山領である椅鹿山について記した「住吉大社神代記」(写真展示)や、この山領を領した豪族、船木連ゆかりの「船木中番古墳群」の出土品も展示されている。特別展をまだ見学されていない方、12月9日まで開かれているので、ぜひ好古館に足を運ばれたい。



勝手野古墳群出土の装飾付須恵器に飾られた猪像(右側)＝県立考古博物館



風土記由来の「山田の里」の時計台＝山田町

千支にちなんで巳(蛇)のお話



市民の皆様、あけましておめでとうございます。新年の1月号は恒例により千支にちなむ話で、小野に伝わる蛇の話を紹介いたします。

長野県出土の縄文土器に蛇体を表した造型があり、しかもお祭りに使われたような土器だから、日本では古来、蛇が特別視、神聖視されていたようだ。蛇の脱皮を生命の再生と受け止め、畏怖を覚えていたらしい。日本文化の古層に蛇信仰が脈打っていることは多くの先学が認めている。

神戸市の桜ヶ丘銅鐸(弥生時代の5号鐸)にカエルを咬む蛇の絵がある。桜ヶ丘銅鐸には農耕賛歌のような絵画が施されているのが有名だが、田んぼの風景の一端を描いたようでもある。

播磨では「風土記」(讃容郡)に蛇のように伸び縮みする剣という不思議な話がある。古墳時代の鉄剣にある「蛇行剣」との関連を指摘する研究者もいる。県内では朝来市にある茶すり山古墳で2本出土している。この古墳の被葬者について県立



今もお祭りされているハメ塚=中島町で

考古博物館長の石野博信さんが新著「ひょうごの遺跡をめぐる」で興味深い見解を披露されている。

また、古代山陽道の野磨駅(上郡町)の大蛇の話も有名だ。法華経を暗唱できない僧の話で、清少納言が「枕草子」に「あわれなること」と書き留めている。

さて、小野の蛇話の第一話は「大池の大へび」。市文化連盟発行の「ふるさと伝え語り」によると、小野大池に病気の子どもの蛇を持つ大蛇が

いて、村人が病氣平癒を祈り続け、回復したお礼に大蛇が「村の人たちが幸せに暮らせるように見守り続ける」といい、村人が祠を建て、祭り続けた。その祠が「九龍熊野の大権現」と呼ばれたそうだ。

市民会館の南の池は「権現池」と呼ばれ、市役所のすぐ西に熊野神社(元・熊野権現社)がある。この伝説にちなむものと思われるが、神社の由来を記した石碑文には特段の記述がない。

◆中島町に残るハメ塚◆

第二話は「中島のはめ塚」で、これも「ふるさと伝え語り」によると、室町時代の応永8(1401)年に大雨で大水がおき、数千匹のはめ(マムシ)が流れ着き、村人が次々にかまれて死に、村を捨てた。ある旅人が浄土寺で7日間祈ると、「奈良の阿(安)倍晴休に退治してもらえ」とお告げがあり、招かれた晴休は「神をまつり、墓をつくってはめをねんごろに葬れ」と教えた。この墓が「はめ塚」で、翌年からはめがいなくなり、よそに移った村人も戻ってきたという。

このはめ塚が中島町バス停のそば

にある。竹柵で囲まれ、木が茂った中に低い盛土があり、供養の木柱が立つ。晴休は有名な陰陽師、安倍晴明の子孫とされているが、安倍氏の系図にはないそうだ。「小野市絵図集本編」では、「中嶋村絵図」(1837年)の西北部に「びょう所」(廟所)と記されたのが「ハメ塚」のことというから、遅くとも江戸後期には祭られていたのは間違いない。地元の話では今も毎年8月初めにお祭りをしていくという。

ハメ塚はほかに下来住町の常楽寺、敷地町などにもあるそうだ。あちこちに塚を築いて祭らねばならないほど、昔の人々はマムシの害を恐れたのだろう。

本コラムはおおむね広報紙の巻末に掲載される。「蛇足だ」と言われないよう、今年1年がんばりますので、ご愛読よろしく。



佐野允彦(さのまさひこ)

1947年生まれ。70年に朝日新聞社に入社し、2010年3月末に西脇支局長を最後に退職。同年7月から小野市学術政策員(広報アドバイザー)として活動中。

松尾臣善ゆかりの地

阿形町の山水荘を訪ねて



松尾臣善の肖像
〔「歴代日本銀行総裁論」より〕

本コラム、意外と(?)愛読者がいらつしやるようで、「興味深く読んでます」とお声をかけていただくときもある。ありがたいことだ。「今度〇〇を紹介して」と要望されることもある。今回紹介する松尾臣善(1843~1916年)はそうしたご要望に応えるものだ。

私は小野といささかなりとも縁ができて8年ほどになるが、昨年1月ごろ、阿形町の料亭「山水荘」で会食するまでは、松尾のことは不勉強にして知らなかった。一言で言うとう、小野出身で、明治新政府で主に財務畑(大蔵省)を歩み、日露戦争前後に第6代日本銀行総裁(1903~1911年)になった人物だ。今月紹介するのは松尾が2月6日生まれ(旧暦)で、ちょうど生誕170年に当たるからだ。

小野出身というのには正確ではなく、加西郡賀茂村西横田(現加西市)の郷土、中根家の出である。1854年、12歳で阿形村の郷土、松尾七兵衛方信の養子となったから、「小野出身」としても特段の誤りではなからう。

松尾家は金融業も営む豪農で、姫



松尾男爵の別荘だった「山水荘」-阿形町で

路藩に様々なかたちで財政援助もしていたという。それほどの名士の子弟なのに正規の塾や学校で学んだ記録がない。書写山で読み書きを習ったほかは、養父自らが家事の見習いをさせながら、実務指導をし、あと

は書物で独学したようだ。

青年期は時局騒然たる幕末で、松尾も養家を出て、勤皇の志士らと交わった。しかし、「何をなすにも先立つものは金だ」と喝破したのは、頭でっかちで大言壮語するだけの人物ではなかったのだろう。

こうした言説が伊予・宇和島藩の名君、伊達宗城の耳に届き、藩士に登用されたのが出世の始まりだった。

その後の経歴、業績については小野とほとんど関係なくなるので、詳述しない。6代目日銀総裁として日露戦争の戦費調達に円滑化などに尽力したことだけ記しておく。

◆別荘は和風の名建築◆

ただ、中央官界で出世してからも郷里のことはつねに気をかけていたようだ。『兵庫県人物史』所収のインタビュー記事(1910年)で、「郷里へ帰って老後の仕事に地方のために尽くしたいと思って、このごろ隠居所の普請を仕掛けています」と述べている。この隠居所が料亭「山水荘」になっている建物だろう。

「小野の歴史を知る会」の顧問で、建築設計事務所を営む内藤正克さんに同行を願い、見学させていただいた

た。加古川を見下ろす小高い山の中腹に建つ、木造瓦葺の純和風建築だ。内藤さんは「明治末期の良質の和風建築。日常的な住居というより、やはりしゃれた別荘風の建物だ。当時では珍しいガラス戸、床まわりが凝っている」と話す。

持参のメジャーであちこち寸法を測り、「江戸間のサイズで設計されている」という。「東京から宮大工を連れてきて建てた」という言い伝えが裏付けられた。

県教委が昨年5月、近代和風建築総合調査の一環でこの別荘も調べた。2014年に報告書が出るようなので、どんな評価が出されるか興味深い。国の登録文化財になる資格は十分だと思う。

若干のお金と時間のある市民の皆さん、一度自慢の鴨料理を味わいながら、建物の良さも味わっていたらと思う。



佐野允彦(さの・まさひこ)

大学で日本史を専攻。元朝日新聞記者。平成22年7月から小野市学術政策員に。実家(富山県高岡市)の「佐野家住宅」は明治後期の土蔵造りで、国の登録文化財になっている。

広報アドバイザー 佐野允彦の「おの歴史散歩」

vol.31

小野藩の参勤交代を探る

小野陣屋まつりにちなんで

今年2013年は小野藩立藩(1643年)から370年、敷地陣屋から小野陣屋に移転(1653年)して360年に当たる。昨年4月の本コラムで「来年は節目の年だから」小野陣屋まつりは「より盛大に」と書いた。それに応えていただいたものか? 好古館とあお陶遊館アルテがまつり協賛事業に取り組んだ。



参勤交代の古文書

それは小野藩の参勤交代に関する古文書と新制作の陶器の人形による大名行列の再現だ。

まず古文書だが、「文化4(1807)年 御参府 御道中一件留三戸弾兵衛」という表紙がついた冊子だ。この参勤交代の総括責任者とみられる三戸(中老職)が書き記した計画書であり、日記(メモ)でもあるようだ。6代藩主、末昭が小野から江戸へ上った際の記録で、参勤行程(休泊地)や参勤に伴う人数の割付、参勤中の家臣の職務分担、宿割りなどを細かく記している。

概略を見ると、3月11日小野出立の予定が19日に延びている。初日は明石で休憩、兵庫で泊まっているが、休憩の明石本陣は廣瀬治兵衛だった。先日、明石市立図書館で調べた



陶人形で再現された大名行列—あお陶遊館アルテで

が、この明石は明石城下ではなく大蔵谷宿で、この本陣・廣瀬のことは明石の資料でも確認できた。江戸時代を通じて代々本陣であった。人割りでは家臣のほかに日雇いが多いのに気づく。宿泊地などの領主

や幕府役人に使者を出して挨拶に出向くのも礼儀であり、口上の文面も記している。恐らく京都所司代へのものとみられる口上では、「持病の積(癩)気」が起き、参上しがたいと述べさせている。

この持病が気になるところで、殿様の末昭公は23歳の若さで病没したが、生来健康面に不安があったようだ。「小野旧藩誌補遺稿」(藤本欣司著)によると、文化8年のことか、癩気が止まらないため、参勤の発駕が再三延引されている。

また、同書によると、文化4年の参勤の責任者である三戸弾兵衛は、江戸入りして1か月余で死去した。さらに翌年になって、ある家臣が「江戸表不行跡」(参勤御礼の御馬料使い込みか?) のため処分を受けている。

ついでながら、小野・一柳家の親戚である伊予・西条藩(愛媛県)の一柳直興は1665年、参勤遅参や役目不行届などの理由で改易されている。この一件の真相は興味深い、紙幅の都合で割愛する。

参勤の経費は、好古館の石野茂三館長の話では、1300石ほどとい、年間歳入の約25%を占めており、

藩財政困窮の一因だったようだ。藩によっては野宿をしたり、幕府役人から借金したところもあったという。

◆陶人形で行列再現◆

さて、作られた陶器の人形は「御道中一件留」の総勢122人のうち101体、馬や駕籠も作られた。姿形は小野藩初代、一柳直次の実家、丹波・園部藩の参勤交代行列図を参考にした。この図は元藩士が嘉永年間の行列の様子を思い出して描いたものという。アルテで作陶を指導しているボランティアアراوح約35人が5か月がかりで仕上げた。緒道具もきちんと再現され、なかなか壮観である。小野陣屋まつり協賛展は3月2日から4月7日まで、好古館で開かれている。大名行列の古文書と人形のほか、今般古文書をもとに復元した陣屋町の住宅地図などの興味深い資料も初公開される。市民の方、ぜひご見学を。



佐野允彦(さの・まさひこ)

元朝日新聞記者。2010年7月から市学術政策員。郷里(富山県高岡市)は越中国だが、藩城は加賀・前田藩領。改易された一柳直興が預けられたのは加賀・前田家で、礼を持って運したという。

動物の天国か地獄か？

「播磨国風土記」に探る

今年、風土記編纂の官命からちょうど1300年にあたり、かつ「播磨国風土記」は715年までに完成したとされるから、ここ23年は風土記ネタはタイムリーと言えそう。今月は小野を含む「賀毛郡」を中心として、風土記に古代の塩泉と動物の姿を探ってみよう。

風土記の記述を簡単に紹介する。

「穂積の里 もとの名は塩野といい、塩水が出るからだ」。穂積は旧滝野町穂積付近とされる。風土記には塩泉湧出の記事がほかに3件ある。揖保郡林田の里（姫路市）には塩水が出る「塩阜」があり、海の水と行き来しており、牛・馬・鹿もが好んで飲む、という。宍粟郡にも「塩村」があり、牛・馬もが飲んでいと記されている。

穂積の「塩野」には動物が飲んだという記述はないが、おそらくここでも動物たちが塩水を飲んでいたに違いない。いかにも古代の牧歌的な光景をほうふつとさせる。

播磨各地で古代から塩泉が湧出していたことは想像するにたかたない。姫路の奥座敷として知られる塩



鍛冶温泉の「塩の井」= 下来住町で

田温泉などもそうであろう。

こう見てくると、市場町の通称「ブツブツ」を想起する。字名は「塩之供御」で、重源上人の弟子、善阿（鎌倉時代）が夢想によって沐浴塩水の泉を得たとの伝承がある。2010

年9月号で紹介したので省略するが、これも風土記の時代からあったかもしれない。

もう1か所、鍛冶温泉が興味深い。市が建てた「塩の井」という石柱には、天正10（1582）年、鍛冶神社の神託により湧き出したとあるが、これも古代から湧き出していたのではないだろうか。白雲谷温泉ゆびかにつかりながら、風土記の時代の塩泉に思いを馳せるのも一興では。

古代、鹿はのんびりと塩水を飲んでおれたわけではない。猪とともに狩の格好の対象であった。勝手野古墳群の出土品に、騎乗して弓矢で鹿や猪をねらう狩の姿を表現した装飾付須恵器があることは本コラムで2回ほど紹介した。

◆稲作パワーの鹿の血◆

また、風土記の賀毛郡雲潤の里に不思議な記述がある。雲潤は加西市北東部から旧滝野町北部にかけての地域という。田の灌漑のため法太川（西脇市の野間川）の水を流そうとの提案に対し、雲潤の大水の神は「私の血は田を耕作するから、川の水はいらない」と断ったという話だ。

この「宍」を鹿や猪とする説があるが、我が恩師、森浩一先生（日

本の深層文化）や谷川健一氏（「神・人間・動物」の言うように鹿と限定してよいだろう。というのは讃容（佐用）郡の記事に、生きた鹿の腹を割き、その血に稲の種をまいたら、一夜で苗が生えたという話があるからだ。古代において鹿の血の霊力が信じられていたのだろう。

弥生時代の銅鐸や土器に鹿の絵が多いことはよく知られた話で、風土記の時代に至るまで鹿は特別な存在であった。森先生は播磨国風土記の各郡の冒頭に鹿の話が多いことを指摘し、原野の主であった鹿（土地の神）を人間が服従させ、土地の開発を進めたことの現れと見ている。

県立考古博物館は4月20日から播磨国風土記をテーマにした春の特別展を開く。上述の勝手野6号墳の装飾付須恵器も出品されるそうだ。



佐野允彦（さの・まさひこ）

元朝日新聞記者。2010年7月から市学術政策員。私的なことながら、県教委から委嘱された「播磨国風土記」の調査員の1人として、2月末から揖保郡の現地調査に向いた。

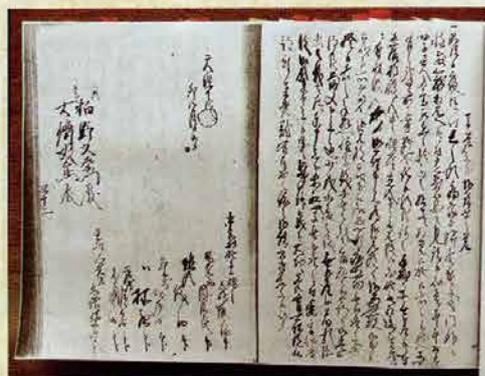
小野藩 捨て子にも温かい目

「児童福祉月間」に寄せて

「中番村の医師宅に捨て子／藩役人了解の下、同家で養育へ」——新聞記事によると、こんな見出しが付きそうな捨て子事件が江戸時代後期の天保14（1843）年8月4日に起きた。「こどもの日」を含む5月は児童福祉月間。小野藩の捨て子施策を中心に子育ての今昔を探る。

この捨て子事件のてん末をたどってみよう。8月4日夜、医師の道伯が往診から帰宅し、門前で籠に入った1歳くらいの女兒の捨て子を見つけた。すぐに村役人を通じ藩役所に届け出て、藩役人2人が現場検証をした。道伯には子がなく、「自家で養育したい」と願い出て、藩が「大切に養育するように」と許可した。

この一件を「小野市中学校郷土資料」（平成20年）に紹介した石野茂三好古館長によると、捨て子禁止令があるものの、藩役人はそれほど厳しい取り調べをせず、捨て子をした親を追及しようとしていない。捨て子には「道伯様」あてで「養育を頼みます」という添え状が付けられており、捨て子をした親と子のない道伯の間で事前に話がついていたので



中番村の捨て子事件を扱った庄屋の古文書＝好古館提供

はないかという。さらに、「村役人も藩役人も温かい暗黙の了解や了承があったとも考えられる」と話す。小野藩の子ども施策を調べらう。三木えり子さんの論文「近世後期小野藩における捨て子と地域社会」（歴史と神戸）41・3号、2002年）

の存在を知った。市史編纂室（当時）の協力のもと、小野藩関係の捨て子文書102件を見出し、丹念に考察した優れた論文だ。

それによると、子どもの捨て場所には子どものいない家が27人と圧倒的に多い。養育してくれそうな家への「目当捨」だったようだ。藩独自の施策だが、18世紀後半以降捨て子の養育先に米1俵を支給している。育児手当のはしりだろう。ただし、その家だけに任せず、村全体でも養育に気を配るよう申し付けている。さらに19世紀後半になると、貧しい農家で養育するのは大変だから「所養育」にする方針が変わる。「所」、つまり村（地域）で大切に養育する代わりに藩から米1俵を支給するようになったという。

◆藩と村で捨て子を養育◆

三木さんは論文で「小野藩では、捨て子を養育するためのシステムが村社会に形成されていた」と結論付けている。捨て子一人にも藩（行政）と村（地域）が「見守り」の姿勢で臨んでいるのだ。

捨て子といえは、豊臣秀吉の子、秀頼の幼名は「捨」だった。これは捨てた子を拾って育てれば元気に育

つという信仰に基づいたものだ。「加東郡誌」（大正12年）には「拾い児」として同じような風習が紹介されている。

小野藩では小児がかかりやすい天然痘予防のため、村々に「兎血丸」という薬を無料配布。当歳（数え年1歳）までの子どもを含む領民一人一人にお金を配った殿様もいる。総じて小野藩は領民に善政を施している。1万石の小藩だから、個々の領民に目を向けた気配りの政治をしたのだろうか。

好古館では子どもの着物の「背守り」も見せてもらった。幼子が無事に育つよう魔除けとして糸で模様を縫いこんだものだ（写真右上）。子に寄せる親の愛情が感じられた。5月19日まで企画展「端午の節句と昭和のおもちゃ」も開かれている。昨今の子育てのありようにも思いをはせていただければと願う。



佐野允彦（さのまさひこ）

元朝日新聞記者。2010年7月から市学術政策員。私的なことながら、子どもは高卒までは親と一緒に暮らすべきとの考えで娘2人を転勤に同道し、何度も転校させ、いまだに娘に恨まれている。

天正期に「織豊系城郭」に大改造

下東条地区の豊地城跡を訪ねて

来年のNHKの大河ドラマは豊臣秀吉の軍師だった黒田官兵衛に決まり、はやくも姫路市は盛り上がりつつある。官兵衛が出世の足がかりをつかんだ秀吉の播磨攻めにかかわるのが、小野市中谷町の豊地城だ。今月は北播磨の中世から近世への転換期に重要な位置を占める豊地城跡を探ろう。

豊地城の歴史は南北朝時代（14世紀）にまでさかのぼるが、紙幅の都合で戦国時代（15～16世紀）に絞って述べる。長祿の変（1457年）、応仁の乱（1467～77年）以降、播磨守護・赤松氏の有力家臣だった依藤氏がほぼ一貫して城主だった。東条谷一帯を本拠地とし、周辺にも勢力を広げた。「小野市史」は依藤氏を「東条谷の雄」と称する。

中谷町は今でこそ市の中心部から見ると東北の外れだが、戦国時代は北播の主要地だった。京都と姫路を結ぶ京街道（丹波街道ともいう）が走り、「八日市場」という市場も立った。依藤氏は交通・流通の要所を押さえるためにも豊地城を拠点城郭にしたのだろう。

丹波の有力武将で幕府でも権勢を



観音堂が建つ豊地城の土塁跡(中谷町)

誇った柳本賢治の東条谷出陣を撃退した1530年から約20年間が依藤氏の全盛期だろう。加東・美嚢両郡の中小国人・土豪を被官に加え、赤松氏の支配から自立し、戦国大名化の道を歩みはじめた。

しかし、武威を誇った依藤氏も1559年ごろにライバルの三木城・

別所氏に滅ぼされ、豊地城には別所安治の弟、重棟が入った。播磨の諸将の中でも別所氏はいち早く織田信長に臣従する。だが、1578年に羽柴秀吉の播磨攻めを巡って一族は分裂。甥の長治は毛利氏につき、重棟は秀吉につく。秀吉が播磨で頼みとしたのはこの重棟と黒田官兵衛の2人だったという。秀吉は三木城攻めを柱とする播磨平定のため、北播の拠点として豊地城の拡大強化（大改修）を後押ししたのだろう。

2010年2月、県立考古博物館が豊地城跡の発掘調査の成果を発表した。その骨子は、大規模な堀と土塁跡が確認され、大量の瓦の残存からこの郭内部に高層の櫓など瓦葺の城郭建築があったことがわかり、天正期（1570年代ごろ）の豊地城が「織豊系城郭」だったと判断したことだ。県内の城郭史上、重要な城跡と言える。

◆土塁跡・堀跡で戦国をしのぶ◆

このたび約3年ぶりで城跡を訪ねた。東条川南岸の河岸段丘上に築かれた平城だが、北の東条川、西の中谷川に囲まれた天然の要害だったことがわかる。城は東西約400m、南北約200mとされ、国人領主の

城としてはかなり大規模だ。現在、観音堂は土塁の上に建ち、みやま保育園東側の池は外堀跡とされる。

かつて堀跡で多量の瓦や甕、五輪塔などが出土し、「城割り」の跡と確認された。三木落城（1580年1月）後、秀吉は播磨8城の城郭破却令を出した。官兵衛ゆかりの御着城（姫路市）なども含まれている。豊地城とされる「東条之城」を破却したのは一柳市介（直末）で、その一族が江戸時代になって小野藩主になるとは歴史の皮肉を感じさせる。

6月、下東条地区の観光交流施設「菅田の館いりどり」がコミセン下東条敷地内に建設される。豊地城の城郭建築をイメージした建物になるそう。地元の活性化委員会など地域住民の地道な活動が目に見える形になって登場するのはうれしいことだ。さらに城跡本体の保存・整備も進むことを期待したい。



佐野允彦(さの まさひこ)

元朝日新聞記者。2010年7月から市学術政策員。私的なことながら、豊地城跡の発掘の取材は記者退職を約1カ月後に控えた仕事。「豊臣政権論」を卒論テーマとした私にはいい思い出となった。

広報アドバイザー 佐野允彦の「おの歴史散歩」

vol.35

古代寺院の香りを求めて

国史跡・広渡廃寺跡を訪ねる



出土した瓦

今から1年ほど前のことだったか、たまたまNHK高校講座「日本史」を見ていたら(私けっこう勉強家なんです)、「奈良時代の都と地方」のテーマのとき、広渡廃寺(広渡町)が紹介されたのは驚いた。「伽藍がほぼ全部確認されている貴重な例」とか。古代仏教文化の香りを求め、今月は広渡廃寺を訪ねよう。

念のためだが、「広渡廃寺」という名前の古代寺院があったわけではもちろんない。昔、「廣渡寺」という寺があり、その跡が「広渡寺山」という地名(↓広渡町)に残り、その由来から命名されたものだ。地名も歴史復元の大事な手がかりとなるのだ。

昭和後期の48〜50年度の調査で寺跡のかんりの部分が発掘され、金堂跡、講堂跡、東塔跡、中門跡など伽藍配置のほぼ全容がわかる遺構が検出された。

発掘前は塔が1基だけの塔単基式の伽藍と見られていたが、これにより東西両塔が並び立つ奈良・薬師寺の「薬師寺式伽藍配置」と判明したことは、大きな成果だった。

「国史跡広渡廃寺跡発掘調査報告



広渡廃寺跡に置かれた伽藍模型=広渡町で

書(市教委、2005年)などをもとに、概略を紹介しよう。寺域は地形などから判断して東西100m、南北150mの規模と見られる。うち回廊が囲む範囲は東西60m、南

北90mで、その中に主要な堂塔が建っていた。地形の制約からなのか極めて南北に細長いのが特徴だ。

さて、南側の階段を上がると、どっしりとした南大門があり、東西に築地塀が延びる。奥に進むと中門があり、その北が伽藍主要部だ。東西に高さ20mはある三重塔がそびえ、両塔の間の奥には寄棟造の大きな金堂が建つ。屋根の両端には金のしやちほこに似た鴟尾が金色に輝く。金堂の西側には鐘楼があり、金堂の北奥は大きな講堂だ。通常はここに回廊が取りつくが、同寺ではさらに奥の北門に取り付く。これは全国でも珍しいかたちだ。

広渡廃寺は7世紀末の創建で、平安時代末まで存続していたと推定される。では、創建者はだれか? 「播磨国風土記」の地名「起勢の里」などから大和の豪族、巨勢氏の関連を想定する見解がある。

◆日本一のセラミック伽藍模型◆

興味深いのは東南約2kmのところにある国宝浄土寺との関係だ。「浄土寺縁起」に、広渡寺の本尊の薬師如来座像が浄土寺創建(1197年)の時、薬師堂に移されたとある。当時の地域の人々の信仰、さらに重源

上人の配慮を感じる。

昭和55年に約2万平方メートルが国の史跡に指定され、その後歴史公園として整備された。発掘調査の成果に基づいて、堂塔の基壇が復元され、縮尺20分の1のセラミック製復元模型も置かれている。この模型は非常に精巧で、NHKで紹介されたほどだから、一見の価値は十分ある。

平成5〜9年度の発掘を担当した好古館・西田猛さんは「広渡廃寺は平安後期まで存続し、長く大部荘(↓大部地区)全体の守り仏となっていた」と話す。

おりしも広渡廃寺跡ガイダンスホールでは7月15日まで企画展「広渡廃寺跡は語る」が開催中だ(無料、月曜休館)。瓦、土器、飾り金具、仏像頭部の羅ほつなど出土品が飾られていて、企画展を見て、歴史公園に立ち、壮麗な古代寺院の姿を想像してほしい。



佐野允彦(さのまさひこ)

元朝日新聞記者。2010年7月から市学術政策員。昭和後期の発掘調査団長を務めた考古学者、故・高井棟三郎さんが私の母校(富山県立高岡高校)の大先輩であることを誇りに思う。

盛んだった小野藩領の寺子屋

伝統受け継ぐコミセンの活動

北播磨のいなか町(失礼)にしては小野は教育熱心な町と思う。近年は市・市教委による脳科学教育やおの検定、小・中連携教育などユニークな教育施策も展開され、県内外から注目を浴びている。その歴史的背景はどうも江戸時代の小野(藩)の教育にあつたように思える。そう広くもない小野市域に40か所以上(通算で)もの寺子屋があつたというのは驚きだ。学校は夏休み中だが、寺子屋の今昔を探ってみる。「いつやるか、今でしょ!」というわけだ。

小野藩では学問・教育に熱心な殿様が輩出した。小藩が生き残つていくには藩士の教育が重要と考えていたからだろう。名君とされた4代一柳末栄は、自らの子どもたちへも「学問を怠るな」と諭している(「御教訓書」1769年)。8代末延は著名な学者を招き、藩校の校舎を新築し、校名を「帰正館」と改称、いっそう学問を奨励した。

通常、庶民の子弟は寺子屋、家塾(私塾)で学んだ。京・大坂などへの遊学も盛んで、麻酔手術で有名な華岡青洲、日本で初めてビールを試験醸造したとされる川本幸民らに学んだ人もい。ちなみに川本は三田藩の蘭学者で、藩主九鬼隆義は小野



左下=寺子屋で使われた机=好古館提供、上=「商店街の寺子屋」の子どもたち=小野商店街

藩主・一柳末徳の実兄である。大塩平八郎の私塾「洗心洞」に学び、大塩の挙兵(1837年)にも

参加した河合西出身の掘井儀三郎のことは前に述べた。掘井は新部村の寺子屋(明善寺)、古川村の私塾・井上塾などで学んでいる。

以下の記述は主に『小野市史』によつて進める。小野の私塾では女性師匠、美崎ちゑ子の「美崎塾」が興味深い。美崎は儒者の娘で、幼少時から文筆の才を発揮、大坂に遊学し、有名な懷徳堂に学び20歳で帰郷。文化年間に黍田村で塾を始め、手習い、往来物、四書の素読を教え、3日に一度修身も教授したという。明治5年まで存続した。

◆寺子屋の師弟の絆深く◆

寺子屋というだけに僧侶が師匠であつたところが多く、小野では身分が判明している者のうち僧侶は8人いる。農民身分が9人もいるが、姓などで推量すると庄屋クラスの一族の人が少なくないようだ。

注目されるのは榎山村の寺子屋師匠、藤木忠右衛門だ。この人の墓は市場町の来迎寺に残っているが、明治8年にかつての教え子たちが亡き師匠を慕って建立したものだ。墓誌銘によれば、日ごろは質素な生活ぶり、人には仁恵・寛裕の心で接し、近郷から慕い来る学童は千人を数え

たという。1844年ごろから自宅前に学舎を構え、「読み書きそろばん」を教え、いっどきに30〜40人もの子弟であふれたと伝えられる。市史は「規模の大きな点だけでなく、20年余にわたつて周辺地域における庶民教育の中心であつたといえよう」と高く評価している。

幕末に日本に來た外国人たちは一様に庶民の知的レベルの高さに驚いているが、その背景は江戸中期以降の寺子屋による庶民教育の普及にあつた。

江戸時代の寺子屋とは性格が違うが、市内では「コミセンの寺子屋」事業が昨年度からスタートした(小野地区は「商店街の寺子屋」)。放課後の小学生を対象に学生や地域の人たちが宿題のほか昔遊び、工作などを指導している。小野の寺子屋の伝統は脈々と続いている。



佐野允彦(さのまさひこ)

元朝日新聞記者。2010年7月から市学術政策員。私の出身大学はNHK大河ドラマの主人公、山本八重の夫、新島襄が創設した同志社英学校が母体である。元一学校だった!

一柳直末、官兵衛の妹を娶る

好古館所蔵文書に記述発見

見出しの「官兵衛」とは、言うまでもなく来年のNHK大河ドラマの主人公、黒田官兵衛のことだ。官兵衛の出身地という姫路は、はや大変な盛り上がりだ。そんな中、小野市立好古館が「一柳直末が官兵衛の妹を娶った」という史料を見つけたと発表した。今月はこの史料の周辺を探訪しよう。

この発表が行われたのは7月25日、市役所での市長臨席による記者懇談会でのことで、広報アドバイザーとして私も同席した。肝心の史料は好古館が所蔵する小野藩主の「一柳家文書」にある「丙午録」という冊子で、江戸中期以降の編纂物だ。大名家としての一柳家の開祖、直末の一代記で、直末と官兵衛の関係が数か所に記述されている。

最も注目すべきは「直末の妻は官兵衛の妹で、秀吉の親媒酌で娶った」と明記した上で、官兵衛その人については「姓氏未詳」と記していることだ。

黒田家の先祖は近江・佐々木氏や播磨・赤松氏などとされる。両氏とも武家の名門だから、もし本当なら官兵衛はそう名乗ればいい。妹の嫁ぎ先の一柳家にそう伝えていないと

すれば、胸を張って述べるほどの名門・名家の出身ではなかったということなのだろう。

続く注目すべき記述は、「官兵衛は姫路城主・小寺（もと黒田姓）職隆の家臣となり、職隆は官兵衛を養



上=直末と松千代を祭る磐代神社(西本町)
右下=直末と官兵衛の関係を記した「丙午録」

子とし、娘を妻とした」とあることだ。

有名な学者、貝原益軒が編纂した黒田家の公式家伝「黒田家譜」（1688年完成）には「官兵衛は職隆の実子」としているから、食い違う。一方、西脇市黒田庄町の莊嚴寺に伝わる「黒田家略系図」には、地元の黒田城主・黒田重隆の子の官兵衛が職隆の養子となったとしている。「養子」という一点では、「丙午録」は西脇の系図を裏付けることになる。

◆秀吉、一柳、黒田トライアングル◆
さらに「丙午録」には直末が小田原出陣の山中城攻め（1590年）で戦死したことを秀吉に伝えたのは官兵衛であること、幼少だった直末の遺児、松千代を官兵衛が引き取ったことなど、いくつも興味深いことが書かれている。

実は松千代を巡っては一柳家では家督相続の内紛があり、黒田家で養育されていた松千代は14歳で不慮の死を遂げている。こうしたことで、一柳家と黒田家はその後不仲になったとされる。好古館前の磐代神社は一柳家の氏神だが、ここに直末と松千代が祭られている。市民にも意外と知られていないことだ。

秀吉が官兵衛の妹を子飼いの家臣、直末に嫁がせたのは、官兵衛を秀吉側に取り込む策であったろうし、官兵衛にしても直末と縁を結ぶことは秀吉軍団の中で重きをなすのに役立つことだったろう。要は両者が秀吉の天下取りを支えた一翼となったということだ。

好古館の西田猛副館長は「官兵衛は太閤渡しまで来ている」との考えだが、私は豊地城（中谷町）にも足を運んでいると見ている。その豊地城の旧主だった依藤氏の重臣に栗山氏がいたが、その一族（栗山利安）は黒田家の重臣になっている。

このように小野と黒田家とは三重の縁がある。好古館は10月1日から未公開だった「丙午録」を展示するが、大河ドラマ放映の前にこの秋は戦国ロマンにひたるのも一興かと思う。



佐野允彦（さの・まさひこ）

元朝日新聞記者。2010年7月から市学術政策員。私的なことながら、記者として最後に在勤・在任したのが西脇市。いま西脇は系図などをもとに「官兵衛の里」として売り出しに熱が入る。

南北朝のドラマ秘める河合城跡

赤松氏の北播磨の拠点を探る

今から570年前の嘉吉3(1443)年9月、京都で「禁闕の変」と呼ばれるミステリアスな事件が起きた。これを発端に播磨・赤松氏の旧臣たち、そして河合城(新部町構)は南北朝・後南朝の激動の渦に巻き込まれていく。県立考古博物館で秋の特別展「動乱! 播磨の中世——赤松円心から黒田官兵衛まで」が10月5日から始まる。今月は南北朝期を含む室町時代の歴史の舞台に登場する河合城跡を探ろう。

「禁闕の変」から16年前の応永34(1427)年10月、播磨国守護、赤松満祐は播磨国召上げという前將軍・義持の命に抵抗し、京都の自邸に火をつけ、播磨に退去した。そのとき、満祐は丹波路を經由し「東河合堀殿」の城に入った。これが河合城のことと推定される。

◆足利將軍の首持ち帰る◆

さらに嘉吉元(1441)年6月、満祐は京都の赤松邸に招いた將軍義教を暗殺、首を取って摂津經由で播磨に引き上げる(「嘉吉の乱」)。このときも河合堀殿城に入っている。

「小野市史」は、「河合城は京都と根拠地西播磨を往還する赤松氏の中継所として機能しており、赤松氏の東播磨における重要な拠点となって



赤松氏の東播磨の拠点だったとみられる河合城跡。水路わきに表示板がある。(右下は郭の配置図)

いた」と的確に指摘している。この乱で播磨最大の武門、赤松氏は没落し、以後山名氏の支配下に入るが、ここから赤松氏(総領家)の再興運動が始まる。その足掛かりは

「禁闕の変」で奈良・吉野の後南朝の手に渡っていた三種の神器の一つ(勾玉)を奪還し、北朝・幕府に恩を売ることだった。長祿元(1457)年12月、赤松旧臣一行は後南朝の二王子の首を取り、勾玉も一時奪取する。

この前後の経緯は波乱万丈、かつ複雑で、歴史ドラマを見るような感じだ。実際、この「長祿の変」は平成18年にうるおい交流館エクラで「ふるさと小野・音楽絵巻」として上演されたので、ご覧になった市民も多いだろう。

「長祿の変」に関する史料「南方御退治条々」(上月文書)が、たまたま「小野史談」の最新号(第61号)で紹介された。現代語の読み下し文が付けられ、注釈や解説もあるので、古文書が苦手という人でもわかりやすく読める。

この文書を読むと、後南朝への討ち入りには中村氏、上月氏、依藤氏、河高氏ら北播磨の武士がかなり参加していることがわかる。中村氏は金鐘城主、依藤氏は豊地城主であり、そして上月氏こそ河合城の城主であっ

たらしい。私は「上月」という名前に引きず

られ、上月町など西播磨の武士と思っていた。これも「小野市史」に教えられたことだが、上月氏は赤松氏の「一族衆」で、室町時代前期には東播磨に拠点を移し、遅くとも15世紀初頭には居館(河合城)を設けて本拠としていたようだ。

◆河合城は大規模な平地城館◆

さて、その河合城だが、加古川の西岸近くの平地に築かれた城館で、東西約250m、南北約200mという大規模なものだった。中央部は「源氏屋敷」と呼ばれた主郭で、左右に副郭を備えていたことが小字名などからわかる。戦後も残っていた堀や土塁は昭和50年のほ場整備により消滅した。いま城跡の面影はない。かろうじて水路が堀の一部を利用したものと推測されるくらいで、一國の守護館に匹敵するような城館跡が姿を消したのは史跡保存の立場から言えば残念なことだ。



佐野允彦(さの・まさひこ)

元朝日新聞記者。2010年7月から市学術政策員。本欄でも度々紹介した恩師の考古学者、森浩一先生が8月6日に亡くなられた。「現地を歩け」という教えをかみしめたい。

店報アドバイザー 佐野允彦の「おの歴史散歩」

vol.39

諸藩に先駆けた火消し制度

小野藩の火事と消防を探る

本欄のネタに困ると手にする本の一つが「小野市中学校郷土資料」（平成20年）。中学生向けの副読本ながら、小野の歴史や地理のあらましが簡潔にわかるすぐれものだ。その中で「早くから設置された小野藩の火消組織」という興味深い記事を見つけた。11月9日から15日まで秋の火災予防週間。今月は江戸時代の火事と消防制度を探ってみよう。

◆全国初の火消制度か？◆

前記「郷土資料」の記事はざっと以下のようなことだ。中番村の庄屋が書き残した「永代記」享保3（1718）年10月の条に「町や村で火事が起きた時は、庄屋・年寄のうち一人が旗印を持って出動すること」とある。藩主は末札公の代だ。

これは藩が小野町の愛宕神社境内にあった町会所に招集した村々の庄屋たちに消火活動を命じたものだ。旗印は藩主から下げ渡されるが、馳籠・鎌鎗・鷹口などの消火道具は村々で用意するよう申し渡されたのだ。中番村の場合は、消火出動時の陣容・道具は旗持ち1人、人足15人、馳籠9つ、鷹口1本などを割り当てられたという。世界最大の都市で人口密度も高かった江戸の町は、火事が多発する

都市だった。「火事と喧嘩は江戸の華」と呼ばれたほどだ。消火活動は諸大名・旗本らの武士階級だけではとても間に合わず、町人も起用された。享保3年11月に南町奉行・大岡越前守忠相が組織した「町火消」制度だ。



上＝江戸時代、町行政を担う町会所のあった愛宕神社（本町で）
右下＝江戸末期の消防ポンプ「竜吐水（りゅうどすい）」（好古館で）

とすると、小野の町（村）火消は江戸の町火消より数日早い、全国初の創設ということになりそうだ。石高わずか1万石の小藩が幕府や全国の諸藩に先駆けて町民・村民を活用した火消制度を創設できたか、や疑問が残る。諸藩の火消制度の成立時期を詳細に調べる必要があるだろう。しかし、武士の少ない小藩だけに町民・村民の活用に頼らざるを得なかったという事情があったのかもしれない。

◆陣屋町を焼く天保の大火◆

宝暦6（1756）年、奉行所が領内村々に出した触書によると、「火の元は昼夜ずいぶん注意し、風が強いときは夜番を増やし、村中を回ることを通達し、万一出火の節は先年申し付けた通り火消し道具を持参し、駆け付け消火に当たるようにと命じている。この先年の申し付けとは、先述した享保3年の藩からの通達のことのようだ。

また、「小野市史・第2巻」によると、陣屋町に「拍子木番」という役目の者がいて、「泥棒用心、火の用心」などと唱えながら、夜間町内を回っていた。市の安全安心パトロールの先駆けのようだ。名君と呼

ばれた末栄公は安永7（1778）年、番人が履く草履を夏の間は冷たい感触の革草履を履かせるよう指示している。市史は「末栄の領民思いの手柄が窺える」と高く評価している。

ちなみに小野では天保9（1838）年4月、陣屋の湯殿から出火し、町会所をはじめ中心街のかなりを焼く大火が起きた。藩や町方の消火組織がどのように役立ったのか、また役に立たなかったのか詳細はよくわからない。

ここまで「小野市史」の本編や資料編で火消しや火事の記述を探して書き進めてきた。ほかに史料・資料がないか石野茂三・好古館長に問い合わせ、「町火消しから近代消防へ」という平成15年度秋季特別展の図録があると教えられた。とても充実した内容なので、興味のある方は好古館か図書館で、ぜひお読みください。



佐野允彦（さの まさひこ）

元朝日新聞記者。2010年7月から市学術政策員。私の実家（富山県高岡市）の土蔵造り住宅（国の登録文化財）は、明治33年の大火の後建てられた防火建築だ。煉瓦積み防火壁も備えている。

重源と浄土寺、研究・企画多彩に

講演会と企画展に寄せて再訪

重源上人、浄土寺、大部荘と広渡廃寺のことは、本欄ですでに2〜3度紹介した。小野にとつては汲めどもつきぬ歴史と文化財の宝庫であり、永遠の重要テーマである。10月20日には大山喬平・京大名誉教授が「小野の歴史を知る会」30周年記念講演会で「浄土寺・重源・大部荘」と題して話された。また、広渡廃寺跡ガイダンスホールでは両寺関連の企画展が12月28日まで開かれている。今月はおさらいも兼ね、浄土寺などを再訪しよう。

まず大山さんの講演の概略を紹介する。大山さんは日本中世史の専門家で、『小野市史』の編纂・執筆にも携わった。去年アメリカで開かれた莊園研究の学会にも参加した重鎮である。長年の研究成果をもとに、重源を「勸進聖」と位置付け、東大寺再建は日本仏法の再生という国家的事業だった。そのための造営料国として周防と備前2か国の「国務」(国司)に任せられた。これと並行し東大寺の恒久的な財源とするため、「七別所」を定め、そのうちの一つが播磨別所(大部荘)であると概観された。

◆東アジアネットワークの成果◆

重源は小野では新寺院(浄土寺)造営、莊園(大部荘・鹿野原)の開

発などの大事業を推進したが、これらは3度にわたる中国留学で東アジアネットワークを築いた成果だと国際的な視点も示された。

その中で近年の着目すべき研究として評価されたのは横内裕人さんの



右上=浄土寺で使われていた鬼瓦(広渡廃寺跡ガイダンスホールで)。下=西方に沈む夕日を意識した国宝浄土堂(浄土寺で)

『日本中世の仏教と東アジア』(塙書房、2008年)だ。あとでネットで検索したら、1万円以上もする。興味がある方のために書名のみ紹介しておく。

感銘を受けたのは「地域史の重要性を痛感している」と話されたことだ。『小野市絵図集』(2010年)の監修経験から、「村絵図のことは地元の人が一番よくわかる。生活者である市民の視点で絵図を読み解いてほしい」と強調された。

◆寺域の選定に巧みな工夫◆

さて、次は企画展の紹介だ。テーマは「瓦で見る! 伝承で見る! 浄土寺と広渡廃寺跡」。様々な瓦の展示はなかなかの見ものだ。夕日に浮かぶ阿弥陀三尊立像(国宝)の床に反射する光線の説明図などもわかりやすい。さらに、面白い説明文を見つけた。「所在地は、大部荘の北東方、西へのびる突出した台地上にあたり、西方向に遠望が開けた場所がわざわざ選ばれています」。

新寺院建立の地の選定の仕方、先行寺院(広渡廃寺)の本尊を薬師堂に迎える配慮、西日を浴びて浮かび上がる三尊立像の仕掛け、「迎講」という仏事の執行…どれ一つとつて

も中国で仏教だけでなく、天文・暦法、建築など幅広く学んだと思われる重源ならではの仕事ぶりだ。

浄土堂と薬師堂という東西軸に注目した研究があることは、以前も紹介した。最近の成果は山田貴生さんの「浄土寺伽藍配置私考」(小野史談51号・52号)だ。

この論文では、2堂の東西軸は真東・真西軸から約9度振れており、これは9月の迎講の日の出の方向、3月迎講の日の入りの方向に合わせた。振れた西は古法華山頂、真西は法華山頂を指すとしている。山田さんは三木市在住で小野市や加西市で小学校講師をしている若手研究者だ。地元にこういう研究者がいることはうれしいことだ。

市民の皆さん、この機会に広渡廃寺跡、浄土寺、大部荘跡などを歩かれ、小野の歴史を体感していただきたい。



佐野允彦(さの・まさひこ)

元朝日新聞記者。2010年7月から市学術政策員。現役時代、京都勤務のころ東寺百合文書が国宝に指定されるとき、大山先生を取材したことがある。久しぶりにお目にかかったが、お元気そうで何よりだった。

小野最古の絵図、出展される

「江戸から昭和の下東条地区西部」展

新しい年明けの今月で本欄も41回を数える。記念すべき？第1回は2010年の9月号で、発刊されたばかりの『小野市絵図集』を紹介した。当時、元禄15（1702）年作成の久保木村絵図が市内現存最古の絵図とされていたが、最近これより2年古い元禄13（1700）年9月作成の絵図が見つかった。新発見のこの絵図も展示された好古館での特別展「下東条地区西部のくらしと祭り〜江戸から昭和〜」が、1月7日から20日までコミセン下東条で開かれる。

◆新発見の小野最古の絵図◆

私が見学したのは、先行して開かれた好古館でのもの。その内容をもとに紹介するが、新たに見つかった絵図は、「溝井谷用水坊出入争論絵図」だ。中谷町屋口の「屋口村文書」の一つで、好古館と神戸大学地域連携センターの連携調査により屋口公民館で見つかったものという。この合同調査は市内各地区で行われているが、下東条地区は特に地元の取り組みが熱心で、平成22年から毎年地域展を開いてきた。この積み重ねにより地域の歴史の掘り起こしへの関心が高まり、今回の古絵図の発見にもつながったと言えそうだ。

この絵図は脇本、屋口、池田の3



最古の村絵図などが並ぶ特別展（好古館で）

か村の合同利用だった溝井谷の用水を、脇本、池田2村が溝を切りつづすなどして用水を「押領」（横領）したことに對し、屋口村が大坂代官所に訴え出た際の説明資料にしたものようだ。溝井谷の谷川筋、6か所の「井関」、溝などの様子をはっきり描いている。用水の水色の彩色はいまなお鮮やかだ。自分の村の田

んぼを潤す用水を守るため、屋口村の人たちが「一所懸命」になったことが一枚の絵図からもうかがえる。

この争論絵図より半年ほどあとの元禄14年4月の「屋口村絵図」は、これとセットになったものと思われる。村域の田畑、百姓持山、溝・川・池、社・堂・道などを彩色して表している。村人の信仰の拠点の「阿弥陀堂」や備蓄用の「郷蔵」も描かれ、江戸中期の村の構造がよくわかる貴重な絵図だ。争論絵図と合わせ、自分たちの村への強い愛着を感じさせる。

ちなみに元禄14年と言えば、「忠臣蔵」の発端、浅野内匠頭による江戶城内刃傷事件が起きた年だ。

◆300年以上続く地おこし◆
先月の本欄で紹介した大山喬平・京大名督教授が小野の古絵図で注目されたことがある。それは、元禄15年作成の久保木村絵図。これに張られた数枚の付箋の中に「地藏堂屋敷毎年正月三日地おこし仕候」と記されておこし、「地おこし」という村の農耕開始の民俗行事が記録されているのも興味深いと指摘された。

今回の特別展では「祭り」の中で、この地おこし行事も詳しく紹介している。それによると、「年頭に今年

の耕作の安全と水が不足しないよう祈願したもの」という。「牛王（牛玉）宝印」というお札を差した棒（牛王杖）を田の水口やため池の水の落とし口などに立てるものだ。久保木では絵図から310年たった今も付箋にある通り1月3日に行われているというから驚きだ。この絵図も牛王宝印も展示されている。



「牛王宝印」のお札を付けた中番町の牛王杖（好古館で）

私はよそ者なので、いわゆる土地勘がなく、絵図の話一つでもしっかりと理解が及ばない。しかし、土地勘のある市民の皆さまは絵図一枚からでも地域の様々な歴史・民俗が読み取れるはず。好古館の展示を見逃した方、この機会にぜひコミセン下東条へお運びを！



佐野允彦（さのまさひこ）

元朝日新聞記者。2010年7月から市学術政策員。私が小野を車で走って気がついたのは、あちこちに古いお堂が残っていること。堂々たるものだ！ 特別展にはお堂の資料も展示されている。

千年だから馬でしよ

勝手野古墳群の出土品が見もの

本欄は毎年正月、その年の干支の動物にちなむ話題を紹介しているが、今年にはほかの題材との都合でひと月遅れに。千年だから、もちろん馬の話。2回にわたるが、うまくまとめられるかどうか、最後までお付き合いのほどよろしく。

女王卑弥呼のころ（3世紀）の日本について記した『魏志倭人伝』には、倭国には牛馬なしとある。馬の存在、騎馬の風習が確実視されるのは早くも4世紀以降だ。

◆幻の騎馬民族征服王朝説◆

騎馬民族征服王朝説は私も若いころ胸をときめかせたことがある。戦後間もなく東洋史学者の江上波夫氏が提唱したもので、中国東北部あたりにいた騎馬民族が朝鮮半島を南下、海を渡って日本に進出、古代国家を樹立したという壮大な仮説だ。一世を風靡したが、考古学的には立証できないなどとして今では学界では受け入れられていない。

ただし、古墳時代に騎馬文化が日本列島に到来し、当時の社会に大きな影響を与えたのはまぎれもない事実だ。2003年に大阪府四条畷市

の葦屋北遺跡（5世紀中ごろ～後半）で埋葬された馬の全身骨格などが見つかり、「河内馬飼」ゆかりとされ、注目を浴びた。

古墳での馬具の出土や石室の壁画などからうかがえるのだが、騎馬の武人（豪族）が登場するものもこのころだ。ある学者は当時の馬は高級外車であり、かつ戦車にも匹敵したという。豪族にとってステータスシンボルでもあったらしい。



勝手野古墳群出土の須恵器に付けられた騎乗の人物の小像（県立考古博物館で）

市役所そばにある王塚古墳（県史跡）からは、古墳時代の武具の研究者が注目するほどの、立派な甲・冑のほか、刀、鉄鏃などの武器も出土している。5世紀前半から中ごろの、小野地方最大の豪族であり、副葬品からすると騎馬の武人であったと想像したいのだが、残念ながら馬具は見つかっていない。「小野市史」は王塚の被葬者を「河内の王権に従って軍事力の一面を担っていたのである」とみており、河内王権は騎馬文化が特徴的だけに、馬具が副葬されていないのは不思議だ。

◆勝手野の馬具と騎馬小像須恵器◆

小野への騎馬文化の到来は、確実に視されるのは6世紀以降だ。時期が特定できないが、おそらく6世紀代と推測される二葉町の焼山古墳群から轡一式、雲珠などの馬具が出土している。

小野で最も豪華な馬具を持っていたのは、黍田町にある勝手野古墳群だ。同古墳群中最大規模の3号墳は、金銅製の轡をはじめ、鞍・鏡など馬具一式をそろえていた。しかも、6号墳は騎乗して弓矢を構えて狩猟をしている人物像を付けた須恵器を石

室前に立てていた。ただし、出土時点では弓矢は欠損していたが、騎馬の前を走る動物は鹿と見られ、しかも胴部には矢の刺さった傷跡があることから、騎馬の人物が逃げる鹿に矢を騎射した情景を表した小像と推察できるのだ。いずれも7世紀初めのもので見られる。

好古館の西田猛・副館長は「この装飾付須恵器にも騎馬の姿があるから、勝手野の首長は生前、馬に乗っていたのだろう」と推測する。鹿や猪を狙った騎馬像は、奈良時代初め（715年ごろ）に成立した『播磨国風土記』に描かれた狩猟の様子を彷彿とさせ、まことに興味深いものがある。

ただ、馬の埴輪は見つかっていないし、まじない用の土馬なども出土していない。古代の小野地方は馬の文化がやや希薄だったのかもしれない。



佐野允彦（さのまさひこ）

元朝日新聞記者。2010年7月から市学術政策員。私的なことながら、私の干支は古代の狩猟の獲物にされた亥（猪）。本欄も今秋には50回に達する。馬脚を現わさないうちにそろそろ打ち止めかな。

騎馬で先陣、名馬手放す名君

馬どのかかわり、一柳家も様々

2月号では主に古代の馬にかかわる話を書いた。今月は中世以降の話を紹介したい。言うまでもなく中世は「武者の世」。「弓馬の道」の時代で、さうと登場したのが源義経だ。

◆義経の騎馬軍団、小野を駆ける◆

寿永3(1184)年2月、福原(神戸)に陣取る平家を討つため、義経が率いる騎馬軍団が京都から丹波經由で小野を駆け抜けていった。三草山合戦で勝利した義経軍は1〜2千騎とも1〜2万騎とも伝えられるが、「小野市史」は後者の数字は「明らかに誇張である」と否定している。源平合戦は陸(馬)の源氏が海(船)の平家に勝利したとする見方もある。いずれにしろ源氏の勝利により、平家の勢力基盤の一つだった播磨は大きく変貌する。重源上人の活躍も頼朝をはじめ源氏の支援によるところが大きい。

◆大部荘で馬を盗む悪党◆

中世は軍事的にも、産業的(農業、交通・運輸など)にも馬が活躍する



上=久保木町・太鼓屋台の源平合戦・騎馬武者の刺繍絵 下=絵巻に描かれた一柳直盛の騎馬姿(好古館で)

時代だ。牛馬耕も盛んになる時期で、村々にとって牛馬は貴重な財産だった。ところが、永仁2(1294)年、大部荘に「悪党」多数が乱入し、百姓の年貢や牛馬などを奪い、百姓らが困窮するという事件が起きた。これは百姓たちが東大寺に訴え出した訴状の文書が残っているため、播磨だけでなく日本中世史でもかなり有名な史実だ。

◆一柳直盛の関ヶ原合戦絵巻◆

一柳家に伝わる「関ヶ原合戦絵巻」

(現在は好古館所蔵)には、同合戦(1600年)の岐阜城攻めの前哨戦で、一柳家の先祖の一人、直盛公(直末公の弟)が木曾川の先陣を争う姿が描かれている。絵巻には「河戸川の一番越え」と記されているが、いわゆる「木曾川の先陣」と称されるもの。鎧兜に身を固め、馬にまたがり、敵陣めがけ、川を渡ろうとする直盛公の勇壮な姿が描かれている。この絵巻、御先祖の活躍ぶりを顕彰する意味で制作され、伝えられてきたものだろう。小野陣屋まつり協賛展「小野藩一柳氏の先祖」で4月6日まで好古館で展示されているのでお見逃しなく。

◆末栄公は財政難で名馬を手放す◆

「二柳家文書」には小野藩(1万石)の軍役を定めた書類があるが、足輕大将、目付、旗本御大将らの乗馬62匹、小荷駄20匹を用意することを定めている。職務の実態はよくわからないが、「馬上役」という職制もあった。参勤交代のときは、「御馬役」という役職が定められ、宿場で乗馬や駄馬の用意にあたった。なかなか大変な仕事だったようで、無事終えると褒美が出たという。

5代藩主・末栄公は借金まみれの藩財政を立て直すため、自ら質素儉約に努め、藩政改革に取り組み、小野藩中興の名君と称えられる。明和4(1767)年ごろのことだが、藩士の扶持米も支給できなくなり、自らの「手元の金子」で「仙台駒(馬)」を買い求め、その代わりこれまでの馬を売り払い、その差額40両余りを扶持米に充てたという。

かつて地方自治体の財政難のとき、あちこちの市長らが高級公用車を廃するのがはやったときがあった。末栄公の行為はその先駆けと言えようか。

陣屋などを描いた「一柳城下地図」には、現在の小野小学校あたりに馬場や馬屋が記されている。

市内の神社に残る「絵馬」のこと、明治時代の青野ヶ原軍馬育成所のことなども書きたかったが、紙幅が尽きた。



佐野允彦(さのまさひこ)

元朝日新聞記者。2010年7月から市学術政策員。私的なことながら、私の乗馬初体験は学生時代、長野県の高原での観光用馬。わずか20分ほどだったが、馬上は気分爽快だった。

一柳直末と秀吉が縄張り争い

大河ドラマ「軍師官兵衛」余話

NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」が放送され、主舞台の姫路のほか、ゆかりの地の加古川、西脇などはブームで沸いている。小野藩・一柳家の御先祖、直末が官兵衛の妹を娶ったという話は昨年9月の本欄で紹介した。「小野藩一柳氏の先祖」展が4月6日まで好古館で開催中でもある、ブームに便乗して、もう少し両家の話を続けたい。

◆松千代の記事は「黒田家譜」にも◆

以下の記述は、好古館の粕谷修一さんが2月9日、「小野の歴史を知る会」で講演した内容に拠るところが多い。直末と官兵衛の妹夫妻の子、松千代は直末の戦死後(1590年)間もなく官兵衛が引き取る。粕谷さんは今般、黒田家の公式家伝「黒田家譜」にも関連の記事があるのを確認した。それによると、如水(官兵衛)は松千代を「松寿」と呼んだという。松寿は実子の長政の幼名で、如水は甥の松千代も我が子のようにかわいがり、遺品として譲るべき諸道具に松寿の名を書きつけた。しかし、松千代が13歳のとき、剣術の事故がもとで亡くなってしまふ。一柳家の史料は14歳での死去としている。ちなみに「歴史読本」3月号は官



左下=「市助曲輪」の逸話を記した古文書
右上=一柳直末夫妻の陶製人形(好古館で)

兵衛を巡る女たちを特集した。その中で濱田浩一郎さんという研究者は、直末の妻の名を「春勢」としているが、これはあくまで戒名の中の名で、本名とは思えない。松寿が「幼年のころに死去したようだ」という記述も不正確だ。13、14歳を「幼年」とするのは適切ではないだろう。ただ、「直末の死は、秀吉のみならず、

黒田家にとっても大損失であったといえよう」という記述には賛同する。

◆秀吉の姫路城に市助曲輪?!◆

粕谷さんは一柳家に伝わる「御家御先祖書写」という史料をもとに、秀吉と直末の「縄張り争い」という興味深い話も披露した。縄張り争いと言ってもやくざのような勢力争いではなく、城の設計プラン、城郭の建造物の配置(図)などを指す。

この史料によると、天正7(1579)年、直末が秀吉から姫路近辺で二千五百石を受領したころ、秀吉は姫路城の縄張りをしていった。その曲輪を閉門中の直末がひき崩したのを知り、激怒。直末を呼び出し、問いただしたら、「西国の大名も見るのに見栄えが悪いし、万が一の時役に立たない」と答えたため、主従二人で縄張り論争をした。

この結果、直末が勝ち、その縄張りの通りに築城し、閉門も許した。それゆえ、その曲輪を「市助曲輪」と呼んだ。(市助、または市介は直末の通称だ。)だが、後世になり、姫路の者に聞いても「市助曲輪」の名を知らず、場所も知らないという話だ。なお、曲輪(郭)は、城郭の

なかの一定区画の平場を指す。江戸時代の本丸や二の丸などの「丸」に当たる。

秀吉が三木合戦に勝利し、姫路城を播磨経営の本拠地と定めたのは天正8(1580)年で、姫路城の大改修に着手する。縄張り論争はこのときのものだろうか。実は姫路城ファンの間では「市助曲輪」があったという話が流布しているようだが、その出所はわからなかったらしい。今般、粕谷さんが見いだしたこの文書が「市助曲輪」を裏付けるほぼ唯一の史料のようだ。

この史料は宝永6(1709)年ごろにまとめられた、一柳家の史書のようなもの。同家に伝来する文書などをもとに作成したと見られる。

姫路城には、官兵衛・秀吉時代の遺構もあるらしい。「市助曲輪」もどこかに埋もれている、と想像するのは楽しいことだ。



佐野允彦 (さの・まさひこ)
元朝日新聞記者。2010年7月から市学術政策員。かつて記者として在勤した滋賀県近江八幡市には、直末の名にちなむ「市介町」という旧町名があった。今は小野で、一柳家との縁は切れない。

戦国期・栗山家と豊地城の姿

続・ドラマ「軍師官兵衛」余話

NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」のたしか2回目から毎回ほとんど欠かさず顔を見せているのが、黒田官兵衛の直臣、栗山善助。小柄だがなかなか個性的な役者、濱田岳さんが演じている。この姫路・栗山家の同族と見られる小野・栗山家は豊地城（中谷町）とすこぶる縁が深い。豊地城をモデルにしたという「菅田の館いろどり」もオープンした。今月は栗山家と豊地城を巡る歴史散歩だ。

◆戦国期から東条城・依藤氏の重臣に◆

播磨の栗山氏には諸流があるようで、中には名門・赤松氏の一族と伝えるものもあるが、その系譜は不詳だ。だが、飾西郡栗山村（現在の姫路市栗山町）あたりを本貫地とする栗山氏がいたことは間違いないだろう。大河ドラマでは、百姓出身の善助（利安）が若き官兵衛に道端で飛び込み就活するかたちで家来になる場面があった。しかし、一説にはそんな小者ではなく、官兵衛の主君の御着城主・小寺家から付けられた侍（与力）ともいう。ともあれ才覚を發揮し、有名な「黒田二十四騎」の筆頭になる。有岡（伊丹）城の土牢に幽閉された官兵衛を救出するのも善助で、いずれこのシーンも

下=豊地城の復元推定図（好古館提供）
左=栗山氏のことを記した城跡の石碑（中谷町）



ドラマに登場するだろう。

さて、小野の栗山家のことだ。豊地城跡にいまも居を構える栗山家の子孫に系図が伝わっており、「小野市史」第2巻に載っている。それによると、文明年間（15世紀後半）ごろの政行の代に栗山村から豊地に移住し、豊地城（東条城）の依藤氏に従った。その子や孫は依藤秀忠の

時代に宿老（重臣）として活躍したことがわかる古文書がある。

さらにひ孫にあたる久直は、依藤氏が滅んだ後の三木合戦のころ、豊地城に拠った別所重棟（別所長治のおじ）に臣従したようだ。

久直は慶長元年ごろ、多可郡黒田城主・如水孝隆（官兵衛）に仕えたとしているが、ここから系図の記述が怪しくなってくる。久直の経歴に姫路・栗山家の人物（たぶん利安）の経歴を紛れ込ませているようなのだ。

いずれにしろ豊地城は三木落城（1580年1月）後、秀吉による播磨8城の城割りで破却される。栗山家も四散するが、一部は帰農し、豊地城跡近辺に残り、系図が伝えられていたわけだ。歴史は遠い昔のこととでなく、いまも息づいていることがうかがえる。

◆興味深い豊地城の復元推定図◆

福住町のコミセン下東条敷地内に観光交流施設「菅田の館いろどり」が3月末、オープンした。建物は豊地城の櫓（矢倉）をイメージしている。好古館の西田猛副館長がこのたび作成した城郭全体を描いた復元推

定図が興味深い。現地の地形や昭和56年の発掘調査に基づくものという。

「城畑」と呼ばれる所に二層櫓を描き、「古屋敷」と呼ばれる所に主殿を中心にした主郭を描いた。櫓については方形の高まりが残り、周辺で瓦も出土したので、石積み基壇の上に瓦ぶきの高櫓として復元した。別所重棟が城主だった豊地城の最終段階（1570年代ごろ）の建物になるようだ。

城郭史という「織豊系城郭」の様相になっており、播磨平定を目指す織田政権の後押しで改修されたものだろう。発掘現場というのには穴ぼこや溝などが残っているだけで、そこにどんな建造物が建っていたかというのには、素人には想像しづらい。西田さんの作成した推定図を手掛かりに皆さんも城跡にも足を運び、天正期の豊地城の姿に思いをはせていただきたい。



佐野允彦（さの・まさひこ）
元朝日新聞記者。2010年7月から市学術政策員。城ブームで、「城ガール」と呼ばれる女性たちが跋扈（ばつこ）しているらしい。ただし、少なくとも豊地城跡などひなびた城跡では一度もお目にかかったことはない。

江戸時代も博打ばくちに手を焼く

度々の禁令でも後絶たず

生活保護費を手にしてパチンコ屋や飲み屋に走る人がいる——小野市に限らず全国的に問題になってきている現象だ。生活保護費の受給はともかく、江戸時代も同じような状況だったようで、賭けごとと大酒飲みについて幕府も諸藩も度々禁令を出し、戒めている。江戸期の小野の博打事情を『小野市史』などで探ってみよう。

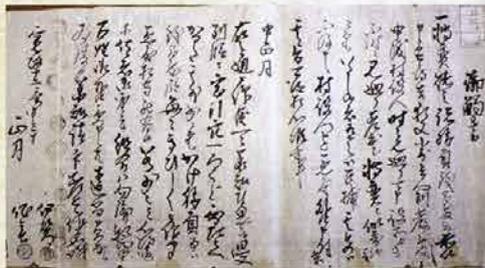
博打と大酒は庶民だけでなく、武士もご法度だったようで、年代は不詳だが18世紀中ごろと見られる小野藩の「家中御条目」では、博打、好色、乱酔などを禁じている。

◆度重なる博打の禁令◆

これと同じ時期（1746年）の「黍田村五人組帳」に記された「百姓心得」では、「酒宴は廃止するよつしむこと。博打、その他の賭け勝負の類は一切してはならない。そむく者があれば、すぐに役所に届け出るように」などと定めている。

時期が早いものでは、天和2（1682）年、奉行から出した高札の「定」が残っており、万事儉約を守り、博打は堅く禁ずるなどと命じている。

宝暦6（1756）年、領内村々の庄屋らに出した「覚」では、博打をしたものは町役人・庄屋らに取り調



博打（賭け勝負）を禁じた寛政12（1800）年の御触書（三枝家文書）。百姓が署名捺印している＝好古館で

べ、役人に届け出ることを命じ、「博打は困窮のもとで、おのずから悪党に落ち入ることになる」と諭している。この覚は計15カ条にのぼり、庄

屋はこれを念入りに写し、村内に周知徹底させるよう求めている。

また、同じ年の6カ条からなる「覚」はうち2カ条が博打に関するものだ。最初の一条は、博打は禁止なのに百姓たちが家業を怠り、博打に興じている者がいるので改めて禁令をしっかりと守るよう厳命。もう一条では博打・諸勝負への宿（場所）貸しが発覚すれば、庄屋・年寄・五人組も過料を科す。その監視のため領内に隠し目付を置くほか、「横目なもの」（監察役）を派遣する、と厳しい対処を示している。

天保12（1841）年の奉行所からの「御触書」は、博打をした者は過料のほか片鬘（片側頭部の髪）を剃り落とす、宿を貸したものは坊主頭にする——などの罰則を明記している。基本的に鬘を結っていた江戸時代、鬘を剃り落としたり、坊主頭にしたたりするのは刑罰の一種だった。

◆五人組は相互扶助の役も◆

幕府・藩が度々博打の禁令を出したのは、町人・百姓が博打に興じることによって家業を怠り、田畑の耕作がおろそかになり、年貢などが滞ることを恐れたためだ。

博打や大酒禁止令は「五人組御改帳」に盛り込まれたものも多い。中には六十余力条にのぼるものもあり、暮らしぶりが事細かく規制されている。このため、かつてはこれらの禁制は庶民をがんにじめに縛りつけ、かつ五人組の制度で相互に監視させたとの見方が歴史学界では一般的だった。

ただし、近年は少し風向きが変わってきて、庶民の暮らしを破たんさせない、また犯罪人を出さないための相互扶助の面もある、との見方も出てきている。

例えば小野では、病気や親が亡くなって耕作できない家がある場合は村中助け合って田畑が荒れないようにするとか、独居老人の手助けや病気の旅人の面倒を五人組で行っているのだ。監視でなく見守りという考えは、江戸時代からあったわけだ。



佐野允彦（さの・まさひこ）

元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員。私的なことながら、私は酒は少々(?)飲むが、賭けごとはパチンコもマージャン、競馬も一切しない。我が人生最大の賭けは妻との結婚。成否?それはノーコメント。

小野開発の2大画期を探る

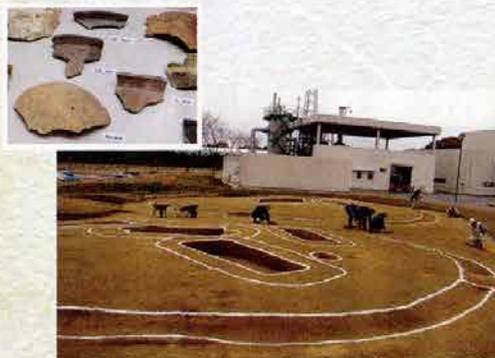
南山遺跡などの企画展に寄せて

今年是小野市制60周年。小野の近・現代史を見つめ直す節目だ。古代から近代までの小野の歴史を通観すると、小野開発の2大画期と言えるのが古墳時代と鎌倉初期だろう。この両時期にかかわる企画展がいま、国史跡広渡庵寺跡歴史公園で開かれている。この2大画期の小野の歴史を探ろう。

企画展は、「南山古墳群と南山遺跡から見た歴史」。南山古墳群については、今年2月に発掘が行われたばかりの1号墳と2号墳の調査成果を速報していて、興味深い。市域には古墳時代（3～7世紀）を通じ大略500基もの古墳が築かれた。

◆木棺直葬墳に葬られた有力者◆

このうち南山古墳群は、古川町南山にあった9基からなる古墳時代後期（6～7世紀）の古墳群。日本臓器製菓（株）の小野工場に残る1号墳と2号墳が今般、市教委（好古館）によって発掘調査されたのだ。1号墳は東西約15m、南北約16mの円墳で、遺体を木棺に入れて埋葬した墓穴は3基あった。2号墳は直径約11mの円墳で、南側に突出部（幅約5m）を持つ「帆立貝式古墳」と見られる。墓穴は5基分あった。



発掘された南山2号墳（手前）と1号墳。上は南山遺跡の出土品（好古館提供）

両古墳の埋葬法は、墓穴に遺体を入れた木棺を納めて土をかぶせて埋め戻す「木棺直葬」という方式だ。全国的には6世紀以降、朝鮮半島伝来の横穴式石室が主流になる。だが、東播磨、特に小野市域では木棺直葬が多いのが特徴で、南山の2古墳もやはり木棺直葬だったわけだ。平成24年7月号の本欄でも触れた

が、実は小野は木棺直葬墳の宝庫で、その様相が知られるようになったのは、昭和33年の焼山古墳群の発掘がきっかけだった。この調査にまだ学生の身分で参加した石野博信・県立考古博物館長が今年2月、そのときの体験談を話された。とても興味深いので、かいつまんで紹介する。

8人の学生が集まったが、古墳の発掘に慣れた者はいなく、京大の田中琢さん（のち著名な考古学者に）がインドの木棺直葬墳の発掘で成功した方法（墳丘に十字形の畦を残し、掘り下げていく「四分法」）を紹介する。英語の本を見ながら、試行錯誤して掘ったという。

両古墳の主は豪族とまで言えないが、小地域の有力者で、地域の開発を主導した人物とその家族と考えられる。古墳が築かれたのは加古川左岸に形成された河岸段丘の中段段丘。有力者が開拓した村々は、低位段丘に広がっていた（たぶん高田宮ノ後遺跡など）と見られる。

調査に当たった好古館副館長の西田猛さんは、「古墳からは低位段丘に営まれた集落を眺めることができ。逆に言えば集落の人々は古墳を日々仰ぎ見ていた」と話す。

◆大部荘開発に備えた窯跡◆

次いで、南山遺跡について紹介したい。これは昭和51年に発掘調査したものを今年3月改めてまとめられた報告書による。同遺跡は窯跡で、生産されていたのは、須恵器の埴や鉢、土師器の埴や釜など、そして瓦だ。時期は鎌倉時代前半（13世紀前半）ごろ。短期的に使った窯で、必要なものを必要に応じて制作したようだ。

当時は重源上人の主導のもと、ほとんど原野だった中段段丘を中心に大部荘が大々的に開発され、それらを経済的基盤として高位段丘に浄土寺が建立された時期だ。西田さんは話す。「この遺跡は小野の新しい時代を切り開いていく役目を担ったのだろう」。

みなさん、7月13日までの企画展を見て小野開発の2大画期の歴史に触れてみませんか。



佐野允彦（さの・まさひこ）

元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員。私的なことながら、次男なので、還暦時にマイ墓を用意した。ただし墓石のある立派なものではなく、慰霊堂のような建物の中の一壺分だ。でも、はかない人生さようならだ。

北播に近代建築を広める

鋭い建築家、内藤克雄氏

西脇市で西脇小学校の木造校舎の保存問題が起きているのをご存じの方は多いことでしょう。でも、この校舎を設計したのは小野を拠点に活躍した建築家、内藤克雄氏（1890～1973）だと知っている方は少ないのでは。今、好古館で内藤氏の業績を紹介する企画展が開かれている。今月は北播磨などに優れた近代建築を数多く残した内藤氏（以下敬称略）の事績を訪ねよう。

内藤（旧姓津田）は1890年、現在の西脇市に生まれ、県立工業学校建築科を卒業、1908年に県庁土木部建築課に就職、県立学校の設計を担当。14年に小野市久保木町の内藤家に婿入り、県庁を退職し設計事務所を構える。結婚が契機だったが、大正初期に神戸や姫路の都市部でなく、北播磨で開業するのは大英断だったろう。今年が事務所開設からちょうど100年になる。

◆公共建築に手腕発揮◆

800件を超す建築の設計を手掛けている。社寺の建物、病院・医院、住宅、農協、会社・商店、銀行、劇場など多彩だが、圧倒的に多いのは学校建築、次いで官公庁だ。専門的に建築学を学んだエリートで、県庁



上=内藤克雄氏（内藤正克さん提供）
下=好古館として活用されている旧小野小学校講堂（西本町）

の建築技師だった経歴が買われたのだろう。海岸部の高砂から内陸部の丹波までの各地で近代的な建物を設計した内藤は、好古館の評価通り「当地方の近代化を支えた人物」と言ってもよい。

実は好古館も彼の設計なのだ。小野市民ならご存じの方も多いただろうが、もとは小野小学校の講堂だった。

1936年完成で、同小創立百年誌には「工費3万7265円14銭」とある。鉄骨が林立し、複雑に組み合わされた建築現場の写真も残る。

当時、隣の旧制小野中学で学んでいた内藤の長男、正克さん（91）は「鉄骨にリベットを打ち込む音がカンカンカンとうるさかった」と思い出を話す。

その正克さんも建築士になり、父の跡を継ぎ、講堂を博物館施設（好古館）に改修する仕事をしたから、縁とは思えないものだ。耐震的にも構造面では何の問題もなく、「設計は50年から100年先までも見据えて」と構造を重視した父親の設計理念がよくわかったという。モダンな中にも風格を漂わす外観はほとんど建築当時のままで、県の景観形成重要建造物になっている。

◆再評価進む内藤の業績◆

正克さんが父の代表作として挙げるのは、好古館のほか旧柏原町役場（現丹波市役所柏原支所）と西脇小学校だ。西脇小も県の景観形成重要建造物だ。紙幅の制約で用語の説明は省くが、研究者によると「ハーフトインバー、セセッション（ワイー

ン分離派）風の外観」で優れたデザイン性を誇るという。

去年人気を呼んだNHKの朝ドラ「ごちそうさん」に、西脇市立日野小学校の旧校舎（現存せず）の設計図が「出演」した。両校は大変よく似た外観だった。

ちなみに小野市は今年市制60周年を迎えるが、旧小野町役場（1931年）も内藤の設計だ。企画展にはこれらの建物の設計図や写真が多数展示されている。

正克さんは話す。「バブルのころ、父が手掛けた多くの建物が鉄筋コンクリート造などに建て替えられ、姿を消したことが残念でならない」。

いま、西脇小本造校舎の保存問題を契機に内藤の業績の再評価が進んでいる。企画展は9月15日まで。ぜひ見学して内藤の業績を知り、さらに西脇小校舎の保存問題にも関心を寄せていただきたい。



佐野允彦（さの・まさひこ）

同志社大で日本史を専攻。元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員。以前も紹介したが、実家（富山県高岡市）の「佐野家住宅」は、国の登録文化財。明治後期に地方ながら洋風意匠を土蔵造りに導入している。

旅人が歩き、武将が駆けつけた「京街道」

下東条 初冬はマラソン人が駆け抜ける

小野市制60周年記念の「小野ハーフマラソン2014」の参加者募集が行われている。コースには中世の京街道が組み込まれ、そのキャッチフレーズは「下東条地区に残る中世の京街道は、天下人秀吉が駆け抜けた開運街道！」だ。なかなか洒落た言葉に惹かれ、12月7日開催の本番を前に、京街道（らしい道）を歩いてみた。

ここで言う京街道は播磨府中（姫路）と丹波、または摂津經由で京都に至る街道のこと。本来のルートは全行程が判明しているわけではないが、下東条地区では東条川流域の「東条谷」を抜けたことは間違いない。

◆室町期の旅日記に記録される◆

羽柴（豊臣）秀吉が登場する前段、南北朝時代の街道の様子がわかる貴重な史料が伝わる。京都の祇園感神院（現在の八坂神社）の元執行（しぎょうとも読む）・顕詮の日記だ。応安4（1371）年9月に京都を発ち、摂津湯山（有馬温泉）で湯治をしたあと、末社の播磨・広峯社（姫路市の広峯神社）に向かう旅だった。どこかの県議が行程・用向きも明らかにせず、城崎温泉に架空の日帰り



豊地城前の三叉路に立つ辻堂。右側の道路が京街道と見られる古い道筋（中谷町）

出張を繰り返すなどの不正をした疑いで辞職したが、この顕詮さん、きちんとレポート（旅日記）を残しているのがえらい！

小野市域を主にその行程を略述する。10月7日朝、湯山を発った顕詮一行はヨコフ（吉川）で昼休み、「東条ノ八日市」の宿「カヤ屋」に泊まる。翌朝出立し、クホ木（久保木）を

て大河（加古川）を渡り、東ノ河井（河合地区）、西ノ河井（加西市）から玉野（同市）を通り、ミクチ（同市三口）で昼休みをとった。

八日市は曾根町・池田町付近（または小田町付近）とされ、そこに八日市の市が立ち、宿屋があり、久保木には「四日市」もあることが記されている。

実は、これは注目すべき記述で、東条谷のうちの推定5キロほどしか離れていない地域に定期市が2か所も立ち、宿屋まであったことがわかる。室町期の東条谷は北播磨有数の流通経済の拠点、中継地として繁華な街道筋を形成していたと推測されるのだ。

◆東条谷は交通、軍事の要衝◆

戦国末期、播磨進攻を図った秀吉も交通の要所、軍事的な拠点として、豊地城に拠った別所重棟を後押しし、三木城の北方を固める中核城郭にしたのだろう。この城郭の大改修にあたっては、秀吉が軍師・黒田官兵衛を伴い、陣頭指揮に訪れたと想像できる。

秀吉が京街道を駆け抜け、また豊地城に在陣したことを裏付ける確か

な史料は残念ながらない。ただし、新部村の山田新介に軍勢の加古川渡河に協力した謝礼として船頭4人の人夫役を免除する証文が伝わる。渡河後、豊地城に入ったことは間違いなからう。小田町から福住町へ上がる坂道が「浮坂」と呼ばれているのは、秀吉が「ういさか、ういさか」と掛け声をかけながら上ったからと伝える。脇本町には「秀吉の馬渡し」という伝承地などもある。

冒頭のキャッチフレーズを考えた好古館長・石野茂三さんは「秀吉は別所重棟を頼みにしており、京街道を通り、宿营地などとして度々豊地城を訪れ、戦略を練ったりしたことは想像に難くない」と話す。

市民の皆さま、マラソンを控えた秋日和に古い街道の面影を残す下東条地区の道を散策し、小野の歴史の一端を体感されてはいかがでしょうか。



佐野允彦（さの・まさひこ）

元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員（広報アドバイザー）。私的なことから、私の実家（富山県高岡市）は江戸時代の北陸街道に面して立つ。なのに当の私は、道を外れればなしの人生街道を歩んできた。

軍下町・小野の近代史を訪ねる

司馬遼太郎も青野原戦車連隊に入隊

今年是小野市制60周年の節目だが、単におめでたいと喜んでばかりおれない。小野の近代史は、軍と戦争を抜きに語れないからだ。中でも旧陸軍の演習場と戦車連隊のあった「青野ヶ原」台地の存在は非常に大きい。その全体像を語る能力は私にはないが、「小野市史」などからいくつかをピックアップしたい。

青野ヶ原の軍事化第1弾は、1888(明治21)年の「青野軍馬育成所」の開設だ。続いて1900年に「砲兵射撃場」が設置され、これが青野原演習場に拡大していく。青野ヶ原が注目されたのは、播磨の軍都に発展しつつある姫路、近代的な港湾都市・神戸に近く、さらに西日本における陸軍の重要拠点・大阪を控えた立地条件と、かつかなり広大な高燥の原野を擁していたからだろう。

◆演習場での大演習に群衆◆

1903年には陸軍特別大演習、09年には姫路の第10師団機動演習が行われ、数万人の観衆を集めたという。軍隊の演習は周辺地域の一大イベントになったのである。演習だけでなく、郡レベルの運動会のような催し・集会などにも利用された。

第1次世界大戦(1914年開戦)に伴い、俘虜収容所が15年から20年まで設置された。約5000人のオーストリア人・ドイツ人兵士がいて、



戦車連隊のあった青野ヶ原に続く「大寺坂」。左下は、戦車隊の写真(昭和10年代)＝好古館提供

小野の産業や文化に様々な影響を与えた。

青野ヶ原にさらなる転機が訪れる。1939年8月の戦車第六連隊の設

置だ。これまで常駐の軍隊はなく、これが市域初の駐屯部隊だった。この時期の軍備拡張を受けたもので、播磨鉄道も1943(昭和18)年6月、国有化される。青野ヶ原駅(旧大門口)と河合西駅では、数多くの兵隊が乗り降りすることになる。

◆三島由紀夫は即日帰郷◆

その一人がのちに国民的大作家になる司馬遼太郎だ。司馬は大阪外国語学校(のちの大阪外大)を仮卒業、1943年2月1日、幹部候補生として戦車連隊に入隊した。彼自身は「加古川の戦車第十九連隊に入営した」と書いているが(『司馬遼太郎が考えたこと』新潮文庫)、青野ヶ原の間違いであることは言うまでもない。翌年4月、満州(中国東北部)の四平戦車学校に入隊したが、この戦車連隊と満州での体験がのちの司馬文学に少なからぬ影響を与えた。

「小野の歴史を知る会」の坂田大爾さんは昭和19年1月、わか松幼稚園の園児で、戦車連隊の慰問に出かけ、兵隊さんを前にあいさつしたといい、その中に司馬はいたはずだと思いを語る。興味深いエピソードだ。

もう一人の大作家、三島由紀夫(本

籍が加古川市志方町)も1日だけだが、青野ヶ原に姿を見せた。1945年2月15日のことだ。入隊検査のとき風邪をひいていたのが軍医の誤診で「即日帰郷」とされた。その作品「仮面の告白」で、「営門をあとにすると私は駆け出した。荒涼とした冬の坂が村のほうへ降りて来た」。逃げるように駆け下りたこの坂は、「大寺(の)坂」だ。この体験も三島文学に影響を落とすことになる。

まだ青年だった二人の大作家が青野ヶ原で交錯しかかったというのは文学史上の大きなエピソードと思うが、一般には広く知られていないのが残念だ。

戦後、演習場・戦車連隊の跡地は陸上自衛隊の演習場・駐屯地、河合中学校、療養所・病院などになった。だが、現地にはそのことを示す記念碑や標柱、説明板が何もないのはさみしく思う。



佐野允彦(さの・まさひこ)

元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員(広報アドバイザー)。この連載も今月で50回の節目を迎えた。ここで打ち止めと考えていましたが、年内、または今年度末まで頑張って続けようと思います。

【訂正】8月号の本欄で、NHKの朝ドラに「出演」した設計図を西脇市の日野小学校のものとしたが、三木市の北谷尋常高等小学校の誤りでした。訂正し、お詫びします。

「義経の見た風景」を探る

好古館での特別展(市場地区)に寄せて

「義経の見た風景」という興味深いタイトルの特別展が好古館で開かれている(今月16日まで)。判官びいきの日本人は源義経が大好きで、私もまたその一人。今月はタイトルに合わせ、市場地区を歩こう。

義経は福原京(神戸)を拠点とする平家一門を追討すべく、京都から丹波路経由で進軍する。「平家物語」によれば元暦元(1184)年2月4日夜、三草山(旧社町)で平家軍に夜襲をかけ、敗走させる。義経は騎馬軍団を率い、平家軍を追撃しながら、神戸を目指し、現在の小野市場を疾駆する。市場地域に限れば1時間ほどで駆け抜けていったのではないか。

◆忙しかった? 義経一行◆

その間、「義経の腰掛石」で一服し、百姓家の老女から提供されたハツタイ粉の料理(菓子)を食し、お礼に年貢を免除する(「国位田碑」)。従者の弁慶も大きな石を投げて3段に積み上げた(「弁慶の重ね石」)などと伝わる。義経一行はなかなか忙しかったようだ。榎山町周辺に残るこれらの義経伝説も特別展で紹介され



上=「市場村誌」の原本
下=「コクイ坂」(左)と「亀井ヶ淵」の石柱(=榎山町)

ている。「国井」姓の方々は今も榎山あたりにおられ、国位田の年貢免除はなんと明治9年まで続いたそうだから、伝説が歴史になる事例として非常に興味深い。なお、腰掛石は古墳(横穴式石室)で、重ね石はこれらの石の採掘場ではないかという推測が特別展では紹介されている。さて、義経が見たのは、中世「垂井郷」の純然たる農村風景だったろう。加古川中流の東岸の平野部、万

勝寺川や山田川の流域に水田が広がり、百姓家、在地武士の館、社寺などが点在していたであろう。丘陵上にはそれほど改変されていない焼山や榎山の古墳群も望めたことだろう。これらの古墳群の出土品も多数展示されており、必見だ。

「市場」の地名の由来となった「市場(場)」を形成する町場はまだ成立していなかったはずだ。ただ、加古川舟運により現在の万歳橋付近で大量の荷物の積み下ろしがあるとき、臨時の市がたつたことは考えられる。

今夏、好古館が市場地区のお年寄りたちから聞き取りをしたとき、天神町や二葉町あたりに「丹波坂、丹波路と呼ぶ坂や道があった」という話が出たそう。これは貴重な証言で、この坂や道こそ義経の軍勢が駆け抜けていった道なのだろう。

さて、平家方の命令で奈良・東大寺を焼き討ちしたのが市場地区に屋敷を構える下司次郎だったというのが事実として、義経はこの情報を知っていただろうか。知っていたら、市場地区を進軍する際、下司館に火を付けるなり、襲撃するなどの報復をしたと思うが、そういう話は一切伝わっていない。

◆「市場村誌」の原本も公開◆

下司の末裔がかかわる来迎寺の縁起由緒書が収録された「市場村誌」の原本(大正4年の墨書き)が展示されている。私たちがふだん目にするのは昭和9年の謄写版本で、原本は貴重な資料なので、この機会にぜひ見ていただきたい。

紙幅も尽きてきたが、大河ドラマ「軍師官兵衛」がらみで最後に池尻城跡をごく簡単に紹介したい。秀吉による三木城攻めに関係した城らしく、しかも大きな改変を受けておらず、城跡の復元がある程度できそうだからだ。城跡には古墳時代の円墳2基が残り、城の防御施設として活用されたらしい。

いやー、興味が尽きない。16日で閉幕してしまうのが残念。えっ、来年1月7日から20日までコミセンいちばでも開かれるんですか。これはうれしい。皆さんもまたどうぞ。



佐野允彦(さの・まさひこ)

元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員。神戸に住んでからは平家も好きに。「定年後、福原の勉強をしたい」と話したら、「あんたも好きやな」と、風俗街の福原と間違われたよう。もちろん「福原京」のことです!

「城下町」への憧憬やまざ

市制60周年記念でたどる

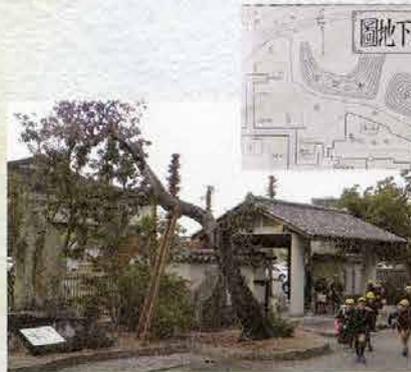
今月は小野市制60周年記念（1日に式典）。本市の直接的なルーツは、江戸時代の小野藩であろう。陣屋が構えられ、町場が整備された。小野の町は陣屋を核にした「陣屋町」だ。それなのに、小野を「城下町」とする情報・資料が氾濫している。単に誤解、曲解でなく、市民の「城下町」への憧憬を感じさせる。憧憬の背景を探ってみよう。

◆城持ち大名から陣屋大名に◆

小野藩主・一柳家の歴史を簡単にたどる。藩祖・直末は天正17（1589）年、秀吉から5万石を賜り、美濃・輕海城主となる（翌年戦死）。弟・直盛は関ヶ原合戦の功で1601年、5万石を領し、1636年まで伊勢・神戸城主であった。ここらが一柳家栄光の時代だった。

直盛は同年、加増され、伊予・西条6万8千石に移封されるが、途中で病没。直盛の遺領は三子に分割され、1643年、直次は播磨・加東郡に1万石を得て、敷地に陣屋を置いた。これが小野藩の誕生だ。

幕藩体制が確立し、所領の石高などで大名が格付けされ、おおむね3万石以下の大名は城を構えることができなかった。いわゆる城持ち大名に対する無城大名で、陣屋を藩の政



上=『小野旧藩誌』の付録の「一柳城下地区図」（一部）
下=小野藩陣屋跡に建つ小野小学校（西本町）

庁、藩主の居所とした。城と陣屋は明確に別物で、当然のことながら城下町と陣屋町も異なることをおわかりいただきたい。

敷地陣屋（大部小学校付近）は先代・直家の飛び地支配のための代官陣屋だったため、おそらく規模が小さく、要害の地でもなかったのだろう。直次は1653年、陣屋を小野

に移す。いまの小野小学校あたりだ。場所は台地上で、北は大池と西に続く深い谷筋、南と西は断崖、東は3か所の池と谷筋によって遮られた要害の地であった。土塁（石垣）を築き、用水・堀を巡らし、喰い違い虎口の大手門を構えた。この陣屋を核にした「陣屋町」について、好古館は「3万石以上の城持大名の城下町に匹敵するほどの要素を秘めている」と評価する。

◆「一柳の城の跡」と歌う◆

小野は「陣屋町」なのに城下町とした最初の資料（管見の限り）は、幕末の文書と見られる「一柳土佐守領分書上帳」（『小野市史第5巻』所収）。そこでは小野町を「一柳土佐守殿城下」としている。「小野II城下町」を広く世に広めたのは、昭和14年刊行の『小野旧藩誌』の付録の「一柳城下地区図」であろう。これは『小野市誌』（昭和44年刊）にも引き継がれ、広く流布した。

「一柳の城の跡 由緒も深い丘のうえ」と歌う小野小学校の校歌も卒業生を中心に市民に城のイメージを植え付けたことだろう。旧制小野中学校出身の詩人で朝日新聞記者

だった坂本遼の作詞で、1962年に制定された。坂本は歴史や環境を調査した上で作詞したというから、城でなく陣屋であるとわかった上で「一柳の城の跡」としたのだろう。小野の歴史に正しい理解を持っていくはずの市教委幹部もかつて「小野藩一柳家の城下町としても栄え」とあるシンポジウムのあいさつで述べたことがある。中学校の副読本も「城下町」だった（最新版は訂正済み）。小野陣屋まつりを取材した記者さえ記事に城下町と書いていた。

一般的には城も陣屋も一くくりにして殿様の居所を「城」と呼び、陣屋の町であっても「城下町」と言い慣わしてきただけのことかもしれない。しかし、陣屋を城と呼びたい領民↓市民の心情には「おらが殿様は城持ち大名であってほしい」という願望が底流にあるように思う。



佐野允彦（さの・まさひこ）
元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員。日本の都市の大半は、城下町をルーツとする。だからこそ多くの日本人の尊厳に触れ、小柳ルミ子の「わたしの城下町」がヒットしたのだ。私の故郷も、もとは城下町だった。

北播磨の鉄道の軌跡を訪ねる

沿線の盛衰とかわる南北の鉄路

新年おめでとうございます。毎年1月号は干支にちなむ小野の歴史・民俗を紹介してきたが、今年の未(羊・山羊)にかかわる話は皆無。頭を悩ませていたら、県立考古博物館の昨秋の特別展「鉄道がきた！」で市立好古館から戦後の国鉄の「乗車券箱」が出品されているのに気付いた。そうだ、鉄道にしよう！

『小野市史』第3巻(近・現代編)によると、東播磨の海岸部と丹波・北播磨の内陸部を結ぶ鉄道計画の第一陣は、今からちょうど110年前の1905年。西村真太郎・隆次兄弟という加東郡の有力者らによる計画だった。続いて登場したのが1910年の「播州鉄道」計画(高砂―西脇)などだ。この計画の中心人物が斯波與(与)七郎だった。

◆斯波氏の尽力で播州鉄道開業◆

斯波は河合村の美業家で、県会議員などを経て1897年から貴族院議員だった。京都の公家の名門、冷泉家から妻を迎えている。堀井城跡が「斯波屋敷」と呼ばれていた。一柳満喜子を描いた小説「負けんとき」(玉岡かおる作)に斯波父子がかな



斯波与七郎
(好古館提供)



滝駅で使われていた「乗車券箱」(好古館蔵)
=県立考古博物館で

り重要な人物として登場する(のちに播鉄創業の功労者として河合西駅に与七郎の銅像が建てられた)。

播州鉄道は1911年に会社設立がなされ、13年に高砂―加古川―国包―西脇が開通した。その後延伸したり、支線を開通したり、繁盛した。

小野や三木の金物、小野の算盤、西脇の播州織など地場産品の輸送に貢献、また内陸部の人々を高砂・加古川の沿岸部の工場に運ぶ役割を果たした。

第1次世界大戦(1914年開戦)に伴い、約5000人のオーストリア人・ドイツ人兵士が俘虜として播州鉄道で青野ヶ原の収容所に運ばれた歴史も生まれた。しかし、大戦後の不況により、播州鉄道の経営が悪化、1923年末、播丹鉄道に引き継がれた。さらに国の軍備拡張路線により沿線に多くの軍事施設・軍需工場がある同鉄道は1943年6月、国有化された。

青野ヶ原駅(旧大門口)と河合西駅では、数多くの兵隊が降り降りし、その中に司馬遼太郎と三島由紀夫がいたことは昨年10月号で紹介した。

加古川線は戦後も様々な歴史を刻む。冒頭で触れた乗車券箱は、加東市の滝駅で戦後間もなくから1966年まで使われていたものだそうだ。木製の六角形で、回転式になっており、行先駅ごとの切符がすばやく取り出せるようになっていた。好古館での企画展「小野市60年の歩み写真展」(2月1日まで)には、昭和時

代のいくつかの駅の写真も展示されている。

◆粘り強く生き続ける加古川線◆

加古川線は戦後の自動車の普及などにより乗客や貨物が減少。1987年、JR西日本の管轄になるが、鍛冶屋線が90年に廃止された。そんな中、1995年1月17日、阪神・淡路大震災が起き、阪神間など沿岸部の鉄道網が寸断され、加古川線はその回路として大きな役割を果たす。あれから20周年だ。

2004年には加古川線全線が電化され、市内の各駅が整備され、コミュニティ・レストランなどが開業した。鉄路と駅舎は再生を繰り返しながら地域にしっかりと生きていく。昨年、市制60周年を迎えた小野市。今年から新たな年を刻んでいく。約5万人の市民を乗せ、列車「小野市号」はどう進んでいくのだろうか。



佐野允彦 (さの・まさひこ)

元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員。駅は出会いと別れの要のスポット。様々なドラマが生まれた。私は若き日、西国・徳島の国鉄牟岐線の終着駅のそばで暮らしたことが思い出の一つ。

小野藩創設の年代を探る

諸説のうち1643年が正しい

この連載は今月で54回を数える。連載開始の2010年9月以来、ずっと気になっていたのが、小野藩の創立年代はいつかということ。市民の皆さんの中には「そんなこと、とうに分かっているのでは」と思われる方が多いでしょう。でもそう簡単な話ではないのです。今月はこの問題を探ってみます。

直接のきっかけは昨秋、一柳満喜子・ヴォーリス夫妻の研究者、芹野与幸さんからの情報提供だった。それは滋賀県近江八幡市にあるヴォーリス記念館に、満喜子さんの遺品として「小野藩創始三百年祭」（1937年）のアルバムがある、というものだった。まとまった写真集は貴重な資料になると、興味を持った。

◆藩創設時期に諸説あり◆

さて、問題の小野藩創始の年代だが、最も簡潔にまとめているのは、『播州小野藩一柳家史料3 將軍・大名・家臣』（平成16年）だ。これによると、

①1636年、伊予西条藩主・一柳直盛没後、伊予などの遺領のうち2万3千石（うち1万石は小野）

（自領を含め計2万8千石）を直家が領し、小野に居住したとし、初代藩主は直盛とする。

②1637年、直家が伊予・川上（川之江）から加東郡（敷地）に着封し、立藩。初代藩主は直家とする。

③直家没後の1642年、養子の直次が幕府の裁量で加東郡1万石の相続を許される。これが小野藩の成立で、初代藩主は直次。



小野藩創始300年記念で立てられた石碑
（西本町）

詳細は省くが、第1説は幕府の文獻に拠ったものだろうが、明らかに間違い。この時点ではまだ「伊予西条藩」で、小野（加東郡）は飛び地（分領）にすぎない。

第2説も微妙に違う。直家は伊予・川上2万8千石（加東郡1万石を含む）を譲り受けるが、これは一柳家の「お家の事情」に過ぎず、「小野藩成立」とは言い難い。しかし、『新編物語藩史』（昭和52年）などは、この説を踏襲、しかも「小野に居所を営み立藩した」としている。一般的に流布している本で誤説がまかり通っているのは残念だ。

もっとも正解に近いのは③だが、これも微妙に違う。『小野市史』や『播州小野藩一柳家史料 由緒書』などによると、正しい経緯は以下のことのようにらしい。

直盛が1636年8月没し、遺領は3子に分与（直家は伊予・川上2万8千石、川上藩）。直家は川之江に居住、敷地に屋敷（陣屋）を置き、家臣を送り、加東郡1万石を管理する。42年急病になり、養子届け出を幕府に出すが、認められない内に同年5月死去、遺領は没収される（川上藩取り潰し）。

◆幕府の裁定で新規に立藩◆

しかし、寛永20（1643）年3月、幕府からの指図として、直盛の関ヶ原合戦の功績を考慮し、養子の直次に加東郡1万石を下し、新規の取り立てが許された。これが小野藩の成立である。直次は同年5月に敷地に入部している。

小野藩誕生は一柳家の御家の事情と幕府の思惑が絡んでまことに複雑な経緯をたどった。しかし、その後は幸いに幕末・維新まで改易や転封もなく、小野の地で存続する。最後の藩主は末徳で、満喜子さんの父だ。小野藩創始三百年祭には一柳家当主一族が招待され、満喜子さんもその中において、アルバムが満喜子さんの手元に残ったのだろう。



佐野允彦（さの・まさひこ）

元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員。私の故郷、富山県高岡市は加賀藩2代藩主・前田利長の隠居所（16万石）だった。3月14日、北陸新幹線（長野ー金沢間）が開通、高岡にも新駅ができる。

国司の郡内巡行、川合里で上がり

古代から水陸両様の交通至便の地

今年度も今月で「上がり」だからというわけではないが、奈良時代、播磨国司の賀毛郡内の巡行（視察）は「川合里」（川合地区）で「上がり」（打ち止め）だったであろうという話を紹介したい。播磨古代史の重要史料「播磨国風土記」完成1300年（ほぼ）にちなむコラムでもある。

◆風土記と河合地区◆

今回の話はおおむね昨年7月、「小野の歴史を知る会」で講演された栗市歴史資料館長、垣内章さん（60）の「賀毛郡の里の位置について」という話によるものだ。垣内さんは加西市出身で、小野高校OBだ。

まず「1300年問題」から始める。風土記編纂の官命が出たのは713年で、2年前がちょうど1300年だった。播磨国風土記が完成した年についてはこれまで715年が有力だった。近年は郡里制にかかわる木簡資料の研究などから717年説が有力になりつつある。垣内さんは遅くともその前年（716年）に完成したとみている。

いずれにしろ諸国のなかで播磨国風土記がもっとも早く完成したこと



古代・川合里にきらびやかに贅を輝かせていたであろう大寺院の河合廃寺（河合中町で）

は間違いなさそう。私は、播磨国庁は中央政府に風土記編纂の計画があることをいち早くキャッチして、準備を進めていたと想像している。官命が出た時点で編纂事業を本格化させ、完成一番乗りを果たした。これには、播磨国庁にいた渡来系の楽浪（からむら）河内ら文書編纂に長けた官人が活躍しただろうと見ている。

さて、播磨国風土記は「川合里」の地名のいわれとして、端鹿川（東条川）と鴨川（万願寺川）が合流する村だからと記す。東西の2川が流れ込むのは大河、加古川だ。これを入れ込んでおいていただきたい。

◆国司は川合で船に乗った？◆

さて、垣内さんの講演の注目点は、風土記での賀毛郡12里の記載順。北西端の上鴨里に始まり、逆時計回りで郡内を一巡して、郡中央部の川合里で終わっている。垣内さんはこの記載順を播磨国司の毎春の郡内巡行の順路に基づいているのでは、と考える。というのも、どの郡も地図にすると一筆書きのように同じ里を経過しないように非常に綿密に考えて書き継いでいるというのだ。非常に興味深い見解だ。

では川合里で終結（上がり）とする理由は何か。垣内さんは川合里は郡外への経路に当たり、しかも印南川（加古川）を利用した行路ではないかと推察する。「江戸時代盛んであった高瀬舟を利用した水運のようなものが奈良朝にも存在したのではないか」。関連の資料をまさぐる今日この頃だそう。



佐野允彦（さの・まさひこ）

元朝日新聞記者。2010年7月から小野市学術政策員。奈良時代私の故郷・越中（富山県）の国司だったのは、万葉集の編纂者とされる大伴家持。歌ばかり詠んでいたわけではなく、国内巡察など政務にも励んだとされる。

私もこの卓見に賛同する。川合里は北播磨内で水陸両様の交通の要所だった。神戸大学地域連携センターの坂江涉さんが1月17日、コミセンいちばで「播磨国風土記の時代の市場地区とその周辺の古代・中世史」と題し講演。市場地区は古来、水陸交通の要所であり、中央諸勢力が掌握しようとした重要地帯の一角を占めていたと述べた。これはそのまま川合里に当てはまる。

さらに私は想像をたくましくする。川合里は賀毛郡きつての豊かな土地だった。それは、河合中町の河合廃寺や新部町の大寺廃寺など複数の古代寺院が並び立っていたことからうかがえる。おそらく播磨国司は河合廃寺あたりで賀毛郡司らに送別の宴を催され、ほろ酔い機嫌で船に乗り、加古川を下っていったのだろう。